消閑雜抄

大正十五年二月上院起草

特別
イ4
1919
379

176647

清河塵拂

大正十五年二月一日起筆

の坊間を漁り得るものを左のごし

一 理斎隨筆　二冊

理斎隨筆は流布せるもの輝綱本より志賀理斎の著すものにして珍書の少しとあるべし、此書は著者の自筆清写本なるを各巻の末に自署あり又二顆の印あり

按ずるに、本一巻の終尾に云く

此稿一巻は文化八辛未歳九月朱一日より採筆ありしも暇を窺ひて書続け

38- 9168

同十月廿三日記畢

牛込漁叟理斎自書

北行記刊本と多くの異同ある故に
もとの草稿のいとまなし 惜しむらくは
中冊 三四二巻を闕く

四冊 一冊

一 外題鑑 (書記)

天保九年文溪堂の刊行する所にして
版を珍らしがらしめんとし 刊本と会はせ
て稿を得るの繁なし 稿本も
同形なり 標紙表に 冊数再取七十三丁
和漢軍記 出後神史外題鑑
小説類

丁子屋平兵衛十二行

とあり 裏に

天保丁酉年十二月再版 文溪堂

とあるも 綴目に「江戸三組書肆 問屋
行事改印」を四ヶ所に捺す
刊本に就んで見るに天保九戊戌年仲秋発
行とあるべき筈なり

北稿本は何人の筆か未だ詳かならず 抜萃
は文溪堂主人なる 富田琴秀 著述と
刊本にあるは 北人の稿なりと云ふべき
歟 訓点を施せる 貞亨 補訂 も刻
歟 春の手を経たること明なり

于本ゝを春の序のごとく本條琴亭の
漢文の長序あり
稗史数の目録前に刊行されたるものの
人名などのみを以て始めとす
目録いこれを以て始めとす
北二書を始めとする文行堂の前日成形図説二十冊相拓
図に彩色を施したるものを見たり、これを拓めて稿に
すべき筆者は無彩色なり、價二分五十四といふ
余購入したる再往しん問くハ既に売れんとなりと告げき
初見の時買いたりしを悔ゆ
文行堂の旅色を捨し一冊洋紙摺りの刊行物を
買ひ見るに、えんを松浦武四郎の一畳敷室の

構造図をも的況四十三年五月南蛮文庫の影
行を係る、巻首に松浦の序あり一畳敷
を作りて動機を叙し、図七枚を収む冬方面よ
り北室を図し、初見の時買ひたりしを悔ゆ
高を仔細に表示し、なるほど木枕の使用法なる部
に載するなるも甚だ乏しき、木片勧化のみ冊
の一書とせて珍品すくなきなり、北の一畳敷
に倣つて室を作りたるなり、北図無るべからず
○白須直といふ人山陽の出情を拓の業し来り
余の鑑定を請ふ、七人大隈合鉄の特写深谷
の義兄を通じて支那と銷夷なりし往歴あり
拓著山陽を携へ来り余を訪ふ此るあるべきも

推の帯の書幅と山陽書と江東と関係ある鼓袖笑の繡巾と詩を和し、ゆるすものなり
初めは長引あり二尺の詩を和し、白に細書
二詩を題す、其引に云く
凡袖笑不推の繡巾上有　長兄及　鄙兄
星出毫紙又次其韻自叙印ゆるゆる道
嘲　鄙兄為他の笑ひ
余展べて凡北の引の書二字の跋を為し
且つ是とする能はず偶碩完の上定めんことを
約す、若し真拓とせば宜しく珍拓ゆる
巾は幅二尺四寸八寸竪二尺二三寸許四方に地を
折りて痕跡を存す、多分平織機なるべし

十二行

竹風居士なるやあらん、縦地なるは杭南の烟霞
を帯ぶ、偶伴は真備さんあるを知れり、元来
し真拓と定まるは宜しく余が隠華に放
ふるもゆゆる、白須は之れを長崎にて得たり
白須曾て支那の蘇州に寄、江辛夷の遺族
目下あるを以て就て山陽のものを見ることを
めしも終に見るを得ざりしと語る、
の前掲松浦武四郎一品2表図の巻首の文は松
浦公の次女の理氏を序文と代へ
ゆゆ、其の型書の全文左の如し
我荒きより一の行書を有す、十余字の跋
夫樺太まで跋面　後南地と来住するゆ

殆と四十年後ここの神田五新河を一区の死所
はとして住めり今茲こゝに一間を建て後こゝに
畳一枚を敷くは是前世の因縁なるべしと
ゝひて畳十八枚は是を今年十九枚は
とゝる、是二十枚の満るをかくの心ゝ、浪四郎
陸奥二升、大夏千間、臥八尺（清盛公出家）寄居所
のふさきこゝ心あけんと自ら歌しき歌
の、市聖ゝる岩屋ハ今も有けんと住ける人を
事ゝうけるこゝの歳を忘ることゝるべ
し
今茲この古枚枚きゝん著作ゝの友を好吳
んしを以て補理ゝ、是まゝ其友を相ゝ

是ハ誰ゝもこゝハ誰ゝを思ひ出る花ゝて
其友の重き志を忘んゝ、其人ゝの言行ひの日出ゝ
ハ誰ことを人ゝ
歌て後ゝまゝ侍らまゝ心をゝ
と、是やこしもめし住けん跡ゝん著か霞ゝ
月のかゝれゝと西行上人のいなんをもおもひて
ゝ
我齢元年八七十とゝん北向きの窓いかゝ冬
の日の寒さん拙ゝん日南りの方ゝ一間を掃ゝ
この地のあゝ火のゝさはひゝばゝく有はもし
ゝき五五ゝ火ゝ
ゝ其陽に心熱倒ゝ怪利
ゝハ猶如生宅の佛の金言

世事こゝろんずるに死せば毀誉比較して之を論
き其是非は大義山に遣り吳やうと其人其
時の機に計ひてよろしくとゝのふべし　只この一事もお
ろかなる誰を問まし、いかすして如何も果も志
を我身を
明治十九年十二月三十一日夜枕頭のもとに
為の会
あるべし

世のわかつり会ぬ身をやすからん
著作年のいとなるもなるべ

○首相が義事の死に臨みて高のひあつれ、あの人は自分

十二行

より年大の一年先輩があつたけれども、年輩は同じくらいである、
まだ死ぬる年もまだ遠い年遠く康が続んでうつれる言
いんでゐるが、肺炎に罹りて淋つたるかもへどうも
年は昔者とうるとも死期を早める、矢張り政局が重要
であるから死、病に罹らざる刺客に斃るゝとの道政
党家の運命は無事なるは死なれば、重ねに常つて斃れ
るが寧ろ政敵家の老養ひある、が義を後援してき
た岩崎家も北の親近を表つれのは不幸と称市るのが
金銭上から言へば、死仏佛をとして供するの比岩崎
家も死仏をとして一切は俗世とは望人ひみれ、
其の日の為が達して棺を蓋あれのは切めもの事じ
あらう、が義が死人ひ義概が思ちる高政会の俗説

を拾遺し又前拾の後任をから得たり、御合の会中
の番面を示すること是非あるべき事ひとあるべし、人間の面
命はめのあるものあり、別人がコンナ様なる前拾とあるを
らうといい想像もしてゐるうつれ、事実コンナ時コン
ナ事が起らうとの想像しるうて
○今著れる拾集の新研究」といふ書を購ひ来つて今
読みつゝあるが、著者いはく坂井衛平といふ人が古頁に
無人とする書いてある、此の拾集の著者に就て、特に
数十種の数本に就て、尚使進び拾集の思
想に就ても委曲に研究してゐる、未だ読了しるへ
から軽率に生れの評をすることを他日に譲るが
先づ自斯る著作の出来ぶりに出るのを私は多

とする、新らしい研究頗ひ古るいものを研究するのを
国酒頗異の徒に一概に曲解が多いといふけれども酒
燈を照らして見ゝるいことが電燈ひ見へると同
じ様に新らしい歌の研究ひ初めて闇ひを得ること
少なくない、自分ハ此等の事に研究家の学を多と
七ねばならぬ
○二三日つゞけて揮毫に時を費す某下らぬ仕
事の大額と化したもの多く墨を磨らせ
ぬ為に、四方より高名の師や親
をやとうて書き為
後学生方ひ手ひ筆ひ熟す、砂後人の比
るべしとして矢鱈に書を生ずるあり

○去ぬる十月頃から頼まれて、一巻
右俵を贈る、肝煎の方新町伊賀
なんど墨乾かさる間、立セしめる故墨
れ方立しを嘆し、猶ちを嫌なんとなるなど
くゑ川岸を絞て七二八の中幅の猶ちく
○あしく味つる、抑墨は日課なれば毎の風味
ものなれば、なまさかなる〳〵る者なく毎の
とく、異を感ずる俗の書くこんが
素人の方領を見る
○多方拙を通る書の風なのこと

二月四日

一華押譜　二月四日記

七冊

文化中拾山義慎編る所基首成
時司直の序を編る者多大内秘城
代仙の凡例を、北溟華押義良古
押譜の編んを補編し、ものを
或拾ひて一の也、且つ編れ也

一 ○沈丑年 御会如歌集　一冊
○沈丑年の御題、風見日く新御
紫宸殿応御歌を次き三條徳大寺
福羽美静（祢宜大輔）黄里義情
房（宮内大輔）坊城俊政（式部歌
支井支実（宮内少輔）以下大宣也

宣等の孫なるを以て収む美濃国
正二十一枚、也、今い拾ひ集めて綴んか
御器朝集の為なるべきものとし
除とす

一　土佐の記　一冊

土佐の地地形　一冊

新刻本解説　一冊

此書は紀貫之の筆前校紀貫之の刻
まる本也、前田家に義書堂家
手写本を底本とせり此本
も体裁の良紙形角なる普通
の写本を瑞瑞改と附したるを揭げ

十二行

解説地理系譜　一冊

一　新羅国東社会山華厳宗仏国寺書誌
大宝元年土佐本村静雄の新刻且
つ考証を附したるもの也此寺北寺
を研究したるものの説を以て時士の
小堂首と時士の作りたる寺の図を掲
北寺石印三十五部を作りたる也一冊

一　江戸名所花暦図　一枚

明治十八年大島圭介編まる本一枚と五
種の図を収む才一図東大寺志像

同弟二法に仕古の図寸巾二長祖年月
江戸図寸巾四寸永江戸図寸巾六寸京
全図、図者の将軍[illegible]昭信[illegible]
也北図今は漏かなし

一御紙三十六帖他　一冊

此出茶村の紙幅を高く
改年方刷し海彩を施しいるもの
甚首と不二尾の序号原本
拙手見人今は明る得かなし（余の
得望の者と拙
敬ひとなり）

十二行

○前日白須益高ら来る山陽神笑の手帖と称する
詩左と拙生す、山陽詩翁を慕する拳神嬢
然の一詩を得たるの外、他活無拳神の詩も千
の学典一字と改めるも、詩後同じかるべし、必と
字を撰らもも左と申
収めあり
芳人玉恩貴人而不見貴人所無則如貴人長
僕千里裏糧本意一学者見跡海外良
縁而為生拙所妹天大海来比根島拙
校書袖咲常森捧研と共因酌後花封
託北態勤薬也為情見度投男家
僕自謂情見不必誠深酒百乳貴手帖
代為数回叙薬と情也叙僕と情也

眼穿翰羽信沈沈辛袖倚寒江閣深三十六
陂秋波綠不如一寸恨君心
牽袖嬌如掩袖啼玉釵敲酒醒時未
恩何千萬妹事阻印郵都在眉

山陽外史 □□

見袖笑所携巾上有 去之及鄭花墨
岩壁沿又次題自叙詩○之寄且嫁
鄭君為他日之笑資
紅暈徐潮玉頰妍酒醒時未為我拔花鈿眉鳥
愛及 春休怪胭脂緣成粉墨緣
不獨淡天託古情更看艷回叢論生花之瀛

昔人云思其人而不見其人所興居之事人當懷千里
裏雖本之於一學 長吉孤海外良像而為造物
所妬天長海遠此恨曷極閑校書袖笑之五指所之
匡目鵝歌莊對花與無無緣直為憐 九泉損
芳容無使自悔恨 見而思識緣酒間說其事怕代
為題詞敘振之情而敘傳之情也

眼穿鱗羽信沈沈辛袖倚寒江閣深三十六陂秋波綠不如一寸恨君心

牽袖嬌如掩袖啼玉釵敲酒醒時未恩何千萬妹事阻印郵都在眉

山陽外史

見袖笑江樓滿中上有 去之及鄭花墨岩壁沿又次題自叙詩又次題自叙詩
紅暈徐潮玉頰妍酒醒時未為我拔花鈿眉鳥愛及 春休怪胭脂緣成粉墨緣
不獨淡天託古情更看艷回叢論生花之瀛

山陽外史

書簡

山陽外史

二月廿日

廿四冊

跋文

得之

編ニ赤支那ニ渡リ得タ也僅敬ノ弘光ヲ得タ能ハ
敗ヲ赤稱獻目ヲ支那重刊シタルニ二種ヲ余
ハ阮元ノ刊行スル不也其
ハ本稿ニ手校本ヲ以テ
一部美使付素仰

眼穿翰羽信沈沈辛袖傾寒江関渠三十六
清秋波緑不如一寸恨君心
拳袖嬌妍掩袖啼玉釵敲酒酒醒時
恩何千載姉妹車阻印郎能知否
山陽外史 口口

見袖矣所携巾上有 赤丸及鄭花墨
蓋是沒又次其韻自叙所〇〇身且婚
鄭君為他〇〇矣賞
紅軍徐湖玉郊妍酒善為我拔花鈿屈為
受及 君休怪脂粉緣成粉墨緣
不獨淡天託古情更看艷句筆端生蓋〇〇瀛

十二行

海苗鴻山一帳吳後計愛卿
山陽生題

〇本日左の二書を始め得る
一七住孟子敬文 二月廿日 廿四冊
山井鼎の編する所支那に渡り得る能ハ
回者の一也 優敬今殆と得る能ハ
ず 支那改ち赤稀觀目とす 支那
五版を重刊したるに二種あり 余
の得たるハ阮元の刊行する所也其
版に狩谷棭斎手校本ありと雖
書体を似て偽造たることを動

すとい

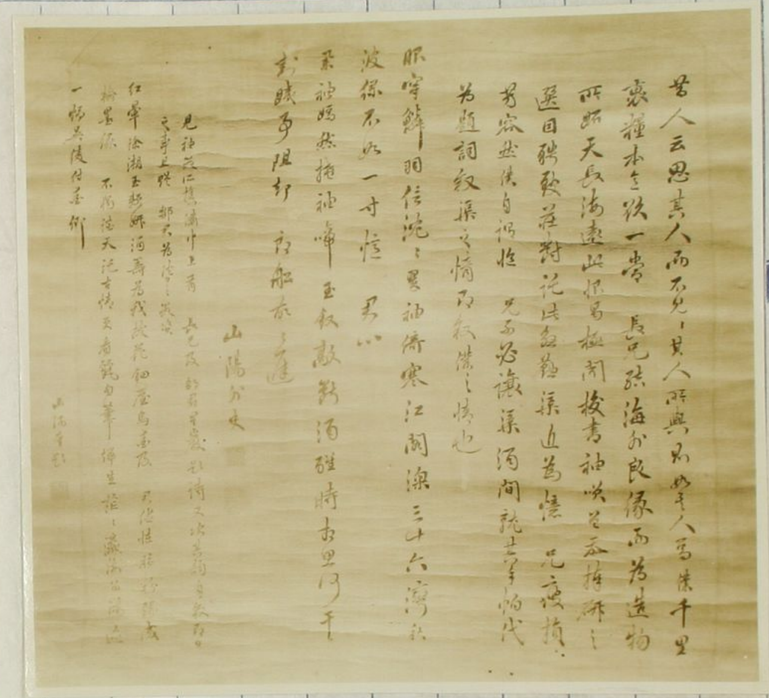
一逢訓栞　十五冊

谷川士清の名著なり普通刊本
六十餘冊なるを抱めて洗練簡略
にして便なり幸に北本篇を抱へ
て置いたりしかもくハ下篇を闕
く並紙本を得て之れを補ふこと
度々北古和本宣長の序あり
本居氏北古を訂正したるものなれども
これハ原古をもまされり刻したる也一
夕首巻を秘蔵し大綱ものの

十二行

新撰ハ今更なること士清の筆情
に敬服す、士清ハ有数の博言学者
なるを皆かず

○前掲山陽袖笑の手帖に和し字詩書の寫法を
収む、北古再三検しても偽筆にあらざることを知り
得ず、但此解を得さる一ハ四方に縫込みの跡
痕跡を存して書ハ縫込を解き字畫外に出
づ、これ何故ぞ、若し山陽の所謂手帖とハ、縫
込の存するより剥すべ、面縫合ハ也字袱紗の
ものなるべ似字、或ハ三絵の掛物を包む袱
紗なるべし、勿卒酒席に書くとなれば



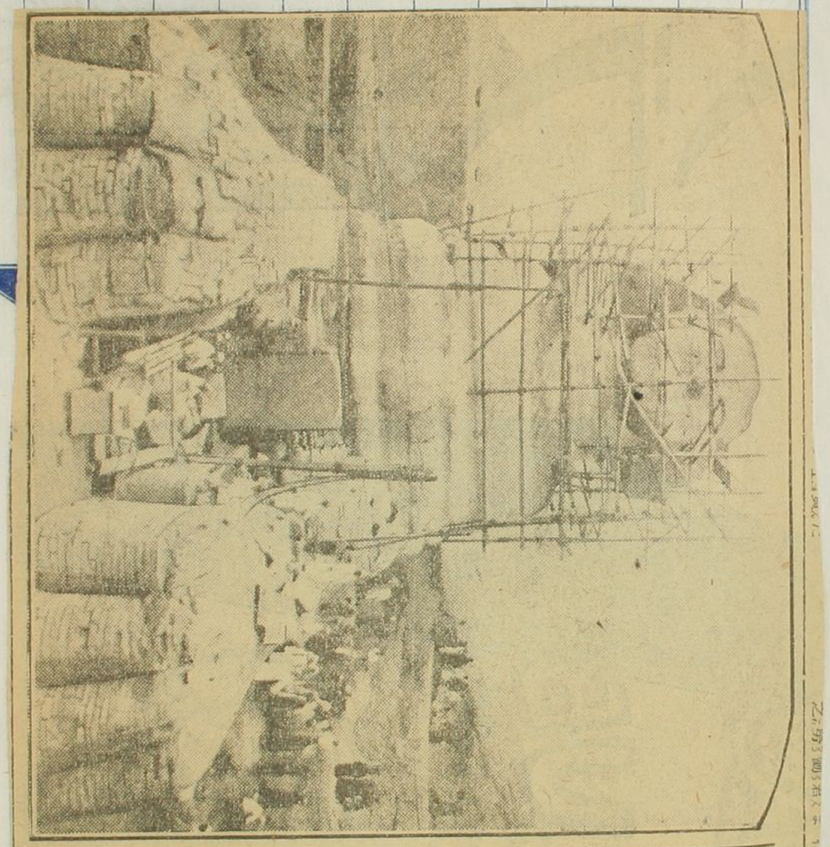
山陽外史

逢辺を解かす原形の俤揮毫すること自然ならざるに似ず、但白を多くまき為め逢辺を解かせずと解し難き。あらさんと祐と会の入りなく酒席如斯の場合を不思議の感あり、高佃家の初頭と緒中云々とある此の手紙とあるは別の巾と見るべし

十二行

○猫狩史山の逸話を前後二段続けて読むこれを別天武皇の罪悪史を小説体に書きなすものなり、武皇は七と太宗の妾なりと武才人と云う大宗生前寵愛これに通じ縁大宗薨後武が尼寺の五月雨を伴れて後宮に納め、終に皇后を廃しこれを武と立てる代わり、武は大宗なりも七三才の年長なり、高宗は武の継母を太宗の御庭多く数七なり、高宗は武の子と弟七子を殺すを意とせり、皇帝七十二北帰人(ごろも)剃髪なりしの後あり、武皇の事蹟は昔日なりし日本人の紙剃髪不なりなり、これを今日の事改ゑるに書きなす

始めとして、武后は歴史上に於ける所謂る新らしきものとして、彼女は本能満足を以て其主義とし而も政治に於ても其目的を達し得たり、彼女は才色兼備あり頭脳明晰、識義に通じ、男子の及ばざるものあり、而して幾多性と一世を風靡したる女流として称賛に値するものなり、彼女は能く天寿を保ち得たるは寧ろ奇とすべし、彼女の法悦の驚くべきは高僧と共に高僧を度せざる此の女傑としては寧ろ怪むべき迄ならざるべからず、唐代の女祖の中宗の時皇后武氏宗の時貴妃楊氏皆毒を流し国家を害す、而して武后の祖は黄金を以て造りたる女流を出す今日此の女流を出す今の女流を或る形に描くべきあるを覚ず

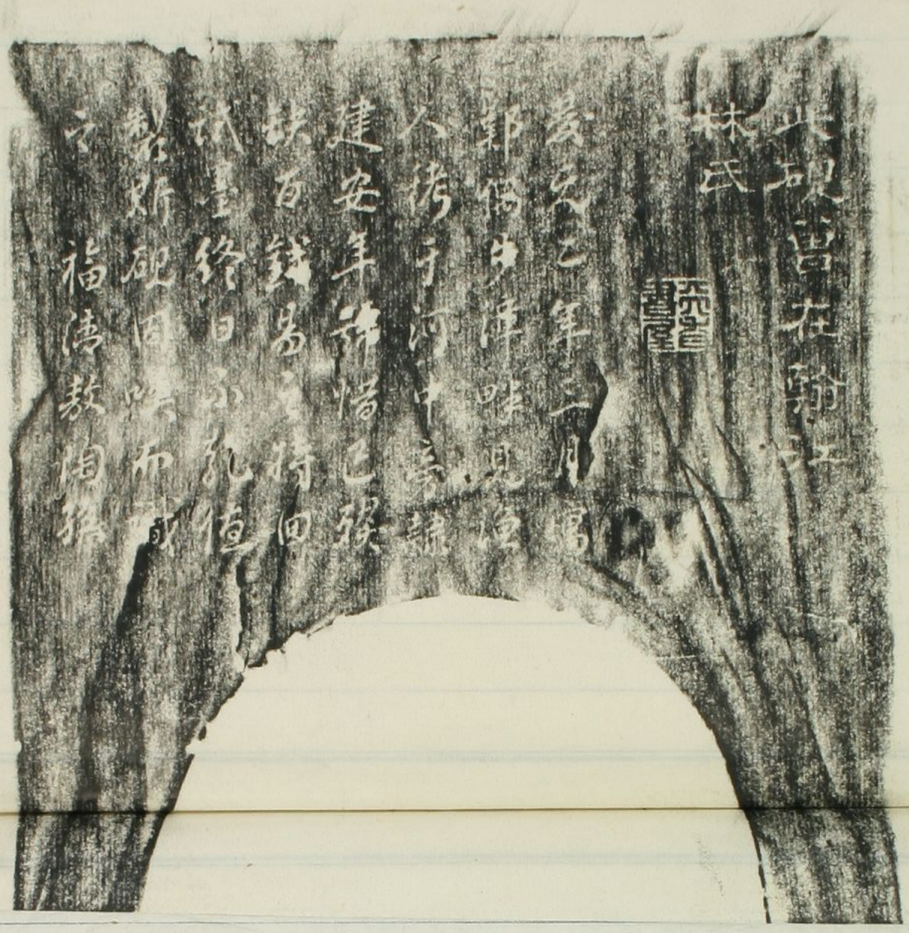


用ゐて
ペンキ
修繕工事で綺麗されたペンキ

の小川為次郎氏遺子睦之輔氏も故人の遺物を贈らる硯大小二面一箱（箱に十五年の刻銘ある）傳瓦硯一箱（円形自然石四寸五分巾三寸許松の刻あり、瓦硯形ヒ一の如し、故人余に書の致味あることを知る、生前常に云く君は至重の義之なりと、北貴（勝故人の貴人なりしも）小川氏なる書家なれども故人の書を認むの料と為す（しかし、前後往年甚だ多き一面の硯を遺し来るこれも故人の遺命なりしも、北海吉い（原注四十三年後人の土地を踏入し時友人四五名を千田の出を訪ひし時差入れなりしものなり）故掬

十二行

し一面き（ものなり）、北の五（果）ハ也も故人の友設の存する未だ満く感謝せざる能を得さる也



此碑當在鄱江
林氏

○近時七經孟子考文各卷汚損多を厭ひ修理
をかゝく標紙を改め帙を作つて四套とす、今此書
の書名の起る所を案ずるに凡例に左の如くあり
世稱十三經而今日七經者據足利學校所有
也臣謹賜告三年校書其中所藏經書本
立經之外論語孝經孟子爾雅及文獻通考有五經六經七經九經之目
而不稱十三經爾雅孟子古不列之經經之
者自十三經始執政之稱也按四庫史經類志
嫡所十三經未詳今奉命錄上其所校同異
題曰七經孟子考文云爾古也

十二行

嬉所撮也 未詳 今奉命録上其所校同異
題曰七任孟子考文六卷古也

六　雙　双　者　役　丸　豊

【照參號五三　頁二〇一】

略　里　八　景

【六一頁　一三七〇號參照】

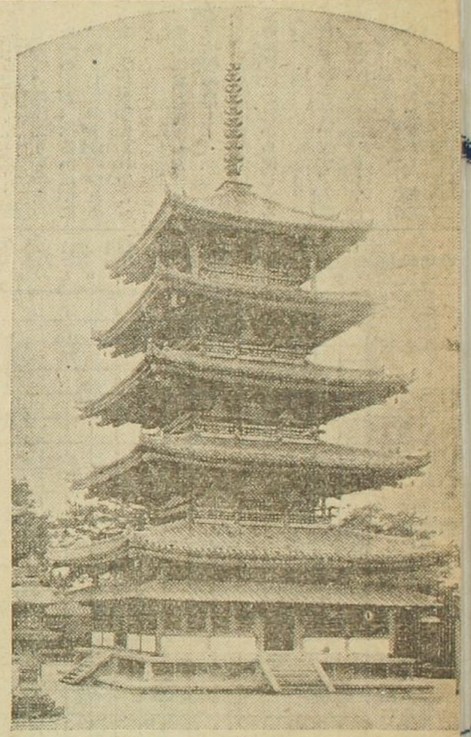
法隆寺五重塔の再建説

根本から覆へさる

礎石と思ひの外柱の下は古井戸

柱の下部に乳房狀のマンホール

池田谷技手が發見



塔重五の寺隆法の題問

【大阪發】日本古代の代表的美術として知られた奈良縣法隆寺の五重の塔の心柱の下部がうつろになつてをるのみかその下が一大礎石になつてをるとは大阪府技師池田谷技手によつて發見されそれを機會に研究した結果同寺の金堂及び五重塔は千三百年前推古天皇時代創立以後そのまゝに再建したものでないと考證が上がつた事の起りは五重の塔を

永遠に 保存すべく卅五萬圓を投じて防火裝置を施す

となり本月四日まで下檢分を池田谷技手が個人的にたのまれ礎石廻りの取調べにかゝつた五重の塔の須彌壇にはかつ〳〵人一人廻るだけの穴（マンホール）があるので同技手はその中に飛び込んで見ると螺線形に約七八尺も進んだと思ふ頃中心柱の下部についた柱の直徑は三尺七寸あつたがその柱にまた一個のマンホールがあり

柱の中 に入ると下は一

面の礎石であらうと思ひの外空井戸であつたそして同時に柱の下部が四尺五寸の高さを有する乳狀形のうつろになつてをるとに氣がついた且井戸の底から推古時代の唐草瓦の破片をも發見したが井戸は深さ八尺二寸幅三尺七寸あつてしかも二尺位はちゃんとうづまつてをり五尺位は四角筋ほり即ち現在のコンクリートやうの内面の細工が明かに看取されたそして井戸と柱との間は花崗石で

礎石を つくつてをるのだが中心に三角形の穴をあけて柱

の下部のうつろとの通風に用ひてをる點など何れも創立以來千三百年前推古時代に使つたものを使つ

實に驚くべき 新發見である

聖德太子の深慮から 舍利埋沒のためか

伊東忠太博士談

右について伊東忠太博士は『今日（十日）私も聖德太子奉讃會理事會の席上で法隆寺の佐伯管長から直接その意外の新事實を聞いて驚いてゐた處でした』と前提して『元來通の塔の心柱は直接に礎石の上に立つてゐるものです礎石の中心には穴をうがちその内に舍利（釋迦の分身）を藏して蓋をなしその眞上に心柱が立つ事になつてゐるのです、然るに今度の發見で法隆寺の塔では心柱の底部と礎石との間に約九尺の空井戸の樣な間隔がある事が分つたのでこれは實に驚くべき

新發見 ですそして報告

によるとこの礎石の中心には矢張り穴が穿たれ銅板のふたがあるといふ事ですからはつきりとは分りませんが多分その中のものも舍利であらうと思はれます、私は元來法隆寺非再建説を有するものではありますがこの發見によつて持説が確定したとは思はれません。といふのは礎石の取扱ひ方は推古時代創立のまゝである事は疑ひのない事であると信じますが上部の構架は一旦横失し直ちに再建されたと想像せられなくはないからであります、この發見で興味ある事はなぜこの法隆寺のみが斯くの如き

手法を 用ひたかこれは

想像が許されるならば恐らく聖德太子の深慮より舍利を深く地下に藏して後世建物が廢滅しても尊い舍利だけは地下にあつて安全を保たせ樣としたからではないでせうか』なほ博士は近日現場の實地調査に赴く筈である

百年改築されたと思はれぬ考證材料を發見し金堂と共に日本書記や大寺年表いろは字類抄等に記載されたる大寺の沿革の一部分を明かにし建したといふ説はくつがへされる譯である

十二行

○下谷の仲町に四年の大震四次をも免かれ今も
なほ存する錦貸園藥舗の家があり、夏と冬
藥草花が珠琅溪書房を開いてゐる頃、貸人の
八幡稲荷の図書館の書籍を蒐集するとこれ三
四年も毎日つゞけびとり出うけて大抵は夏へ上
り込人び書籍も多くこゝに合ひ家の内の校あも
よく知りもみる中くに深く年の書籍びは夏ら
刻会に狭かつたが立派な家であつて殊に二階
の机豆が出来る廣く、市時い書籍び元ちもみ
たが、その苦し藥草こゝに花しにあらう
花の廣い所から推しても錦貸園の夏目の
祖い推測さる、底先の格子をはめてゐたとい

十二行

ふがまんも所り外さんもあつて此の錦貸園の
収蔵をとりつもり家が本郷山と文庫を学人に
といふ、書籍と図書館と偶然有名が
書籍を貸つたといふがおもしろく、自合い学生
錦貸園の家と偶くこれに学の傷を治て
此人び刻会を得たこともあつて昨夜ット
両原梅雨の川柳江戸名物を数しも見ても
錦貸園の書が出てゐる、格子をしめた此
家の図も載つてゐる、其を見て浪人び
見ても、格子ある家が手を出差しなれて藥を
買つた抱負や、中々の安目もあつたことや、藥い
錦貸園はかうもうく、他に此の夫安とする

もあつて、女客の多かつたことゝ、歸途船の菓
のあつたことゝを見て一歩を喫した、事時は
御山降参者と聊の好もし笑賀に供する
元祖了翁僧都が、此宝祠の梦想とう
業伝を授かりし時に、錦の袋と入れて授り
しまう錦袋円と名けも玉を出して不靈
効恰も神の如く怨すること三千面の大金を儲
けたる、上聞に新参を起して典新三郎
餘生を納めの事爾山つ主の許を得て新
宮の屋を弟一とせんとする、主人八代の大師と号
し、表七間の間口を造く格子戸を以て立切
り其通間う薬を渡すの引戸をうまつ

十二行

他に類を見ず尤も東京名不問合こうもう渡
当侍所問うも新宮屋あり、頃を渡
しあるも、全く祖を異にするものゝ如く
一般に新宮屋と云へば、此池端の錦袋円
のことゝ為す

すがいきを強いてのさうな新宮屋（天）
四附けを出しさうな見世新宮屋（化）
素見の錦袋円の格子先（政）
池の端男はうの趣まるが（保）
が為の人と呼びそうな新宮屋（汲）
格子を立切つたるから川物子をすべて
去原の佐見世の格子先を擬したるすがい

きゝ清掬ひ見世えひ内藝者が深三てる吹
てるの三味線をいふ

一　新吾屋きりや板いたにい寄かず　（作）

二　生々きゝの産錦袋円ひ鳴き　（保）

三　黄赤い紅ゆめ　新吾の屋の丁稚　（治）

四　丸薬を産変守から黄はじめ　（化）

五　池の端匂ふ男い紙の名　（慶）

六　格子から銭突く見世の素い芸　（安）

七　手ばかつり出して貰るの八池の端　（天）

八　観音を産るい息子と新吾の屋　（化）

花見時生弁の侍かつを振り回りて板子がある
から大丈夫、二三々新吾院の産黄赤の柳化

十二行

四五ハ一八家屋と屋と屋と一八家屋と屋と屋と板子
の内うあるふらのこと六七ち格子を振て銭
と薬を支拵まる形変、八観音を出して
光あること

新吾屋中條をする洒し藝　（天）

新吾屋か産限薬を産つたことが紀旬ひる
る、但し産錦袋円と刷る効紙ありとも見へず、
車車五本円合こ掲くて本と掲んい錦袋円
こ五方あり　四　黄産痛が減錦袋円　四通住が減
錦袋円　四主効神立錦袋円　四逆上副あ
宣丁酸　四六光薬主農新毎　と有る紙内の
通痛加減錦袋円の下こ一名前の丸といふ

桔梗が絶えたるを、桐の丸を写れる廻姫薬ぶ
ある

世を先へ錦袋円買ひ　（天）
菖の葉屋錦袋円で間に合せ　（天）
大助が薬も二ツ目屋ぐらゐ　（天）
四ツ目へうつとさゝいける勧善屋　（あ）
中條や四ツ目屋い廻姫薬の長元と何人もい
つてゐる、勧善屋ハ其の長家が元目ハいつて
断し難いが、同じことを長つとことが此ず
の句ひ知れる、菖の葉屋とい不忍池に軒
をならべた事あ斎藤也
巻尾に四ツ目屋古今丸の川柳二三を掲ず

十二行

買ひてくひ薬行燈に日か四ツ　（化）
氣が弱くなるや四ツ目屋い買いんぬよ　（天）
晴い高麗行燈を書もつけ　（政）
四ツ目屋い得意の顔をなるぬ也　（化）
古今の薬袋裏からおれ書ん　（保）
頼まんて来ぬと云い筋ぬ買ひとくし　（天）
四ツ目屋く書買ひこ来る行燈あ　（天）
ひも晴いかひと御寮屋をあけ　（あ）
しこくと御寮ハ桐の葉を出し　（八）
御寮といハ大奥ゐの使役と往ひ傳ふ者
ゐ御寮家といふ、ものを嫁ふえて買物の使ひを
出ひ家也

○川船江戸名物の西の関に芦苅の白の高と早稲田の名が見へてゐる、

芦江戸橋名）から南岸の関にかけて白早稲田一帯の地に芦苅まるく今も芦苅谷と云ふ名称が残つてゐる、芦苅ハ（白もと粕辺のお中子の盤特と云ふ）ばんやう者の墓から妃めて生えたと云ふ伝説に基き、芦苅を今ハお元んすると云ひ又ハ馬屋と云ふ

（化）

盤特の墓白の近所

（改）

早稲田の白の盤特の墓のやう

（改）

元んなうれしかこゝらが芦苅谷

（改）

十二行

関口は馬屋に成る所と見るところ

（化）

猫さ稲と早稲田の馬屋に金を溜め

（保）

猫さ稲田の某氏の説と馬屋新子の上手

（改）

早稲田ハ元来馬屋と関係ある、盤特の墓と見立ての白

○辺来切支丹殉教に関する出版のある毎に特に漢人である、自分のノリスト教に信仰のある評ひハ、殉教の史実を後の識する不公あるかもしれない、長い間切支丹と関係することハ関係とあるも新たに発見されし耶蘇教と関係の無い墓碑まで殉教の事蹟なりへ考慮ハ及ハ考ろ以のであるのに、今ハ迄と研究もされ公刊

自由とうちきこゆから、之れを漢訳して見ると国中から
ら的るゝ〜出て来て歌ものを愉快を覚ゆる、えんそうとか
ら無味を感ずゝして北明と称する長崎貴の者ハしに切支
丹宗教を信じ居るかゞ伴なる北の者の如し
とく世を去る寛永以後約百年ごろ、耶蘇教徒
こ過去を忘れ易き殺戮しに至る事跡の例を見るとあつて、一面
峻烈を極める世界と云ふ例を見るとあつて、一面
から見れハ四海皆兄弟と云へるが、保し其の雖も(悪)(る)
内外の信徒が男女老幼の別なく敬然として死に就き
ける事跡と他方と見かとき、一方の矢ハ一方の
比較り補ふことが出来る、まく黄表二年黄表が
異教徒の廿四人を刑に家一〜ら、刑場なる長崎の

十二行

立山ハ悉く家畜の用ひらん、殉教者の鮮
血の流るゝ北山を聖山と呼ぶ所以、北の殉教者
の死のさまの壮烈を極めたる、其報の罪為の聖
廟を造るや、其事跡を調査して元亨年間
二十六人を聖列と挙げ、あ西條約なる日本開国以
後ハ其命日なる二月の者を以て日本二十六殉教者の
祝のとして教会者に記載し以て為年黄一般
元が祝祭を行ハしむることなれ、そして一八六二
年即ち文久二年六月八日聖霊降臨の大祝日の
ゝ教皇が世界各国の主なる代表者を集めて羅馬
のペトロ大聖堂にて彼の世界的大祭典
を挙行したと云ハれる、北の廿六人殉教者の黄跡

八他の一戦をなし、奏美弱後、家産や家宅が異教徒を迫害し、誅戮するの事、寡うして、教徒は天国に列するを求めて死することを帰するかの如く、立派な行後を為けるあるの事績は決して先例に過ぎるものあるべし、

又吾人をして微歎の感情を惹き起さしめざらしめるものあり、

当時武人魂は尚は皎々たるものあるし、時なれど彼等の教徒の死を臨んで怖れざる武人をして後くの時為らしむるものあり、勿論今日傳る事績は多く外国の教会報告なる事実に基くものなれども、武への奏張もあるべし、或は非護潤色もあるべし、内地の於ては此等の出数の多く存在せざるべし、其事実を取消ることは困難なり、況や業教

十二行

者のあるしことも事実に相違なければ、如何ほど信仰の念厚く尚教を甘んずることあるべしとは推察し難からざれども、如何に割引して考へても特別の事蹟の多きに驚かざるべからざるものあり、且つ年を追ふて後ひ異教と称する迫害を加へ、殉教者を陵辱をなく精神の活力を弱る者刻を極めたるものなれば、信徒をして殉教を敢てなしめたることを思へば、信念の必ずや深かりしや殆んど想像の外なるべし、当時人心粗朴なる海藻の氣之しく、外来の教徒は特別性の精神と富士なる、是れ深く人心を牧揚したるなり、思へば力なり、教ゆるに足るべき感化力を有しなるあれば、当時全国に散在せるカトリ

クク教徒の数は三十萬と傳くられ、今は内地に僅かに十萬を過ぎざれど、こは此宗教の衰微するを望まぬ者の現世、[illegible]の理性の発展邪魔を為すものと信ずるなり、然れども抑圧は抑圧の如り壓すれば壓するが如く、市時の為政者が一意鎮壓に力を盡しし言葉思ひさる非常手段を施しなることなき却つて自反動を生じ信徒を[illegible]奉ずる助成するに異つて力あるべし[illegible]の報ずるあるべし、回教の如き[illegible]の不謂る其の注く所の無い後継者を培養する[illegible]糧となるべし。逆言するあらば為政家の採るべき方策を過りたり。おもうに何ぞ[illegible]も禁遏手段概ね其切を奏せざる[illegible]ことを之れに依つても知るべ

き歟

異教徒の為める種々なる拷刑が工夫され、其の拷酷なる人間の能力の極度に達せしに工夫あつたと殺すが主であるのに反して、苦しめる目的が主であつた、苦しめる目的を厚くし、苦しめて他の異教徒の見せを厚かす為めであつた、可成殺さるるもらしめずに苦しめることを主とする腐心した、たんば磔柱に繋いび焚くに極めて一時猛火に室息することを避け、燃料を注ぎ、長く苦しむ時間の長かんことを力めた、あるときは沸湯を吐き出す湯の山獄の責も幸ひ、なれど異教徒を使はして執湯を浴びせられることまれなりしは、惨なるトーナメントの数々モンタ

メーヤの紀事も詳細さん曾て初稿を紹介せるも
多く略するが、トーナメントの尤も著しきハ人倫忍びさ
る不倫のことを肯ルしることである、良人の前に妻を
赤裸々にして、之を他人に淫辱しめんとし、
或ハ他人の後人が裸体のまゝ人妻を抱くを室内に
迫る良人に、いやからもをしとゞ、頑是なきハ兒を母の目
前に苦責して終に死に到らしめ、切なる母を助けも問ふ
る術なきしめ、もしくハ前者の例ハヨハ子内縁夫妻
の場合にあつて、又イサベラといふ婦人も淫乱と残人
の淫辱に委さんとして、後者の例ハアガタの三人の幼兒
が斬られて、場合が最も悲惨を極めて、刀を持つて役
人も此の小弱婦者に対しては流石に刀が揮ひ得ず、

十二行

小さな首を突刺とゞめ切り捨じ、之が為の一層の惨
をかくに、力手も三兒をヤット斬つて自から刺殺して地上
に斃るまでの間、何なる悲惨さ、斯る惨酷なトー
ナメントをあつても婦人の其志を変ぜず、兒が従容死
に就きしかなきことを為すを而も之を
見ることあるを、死を人がいりツの数ハ自己否定といふ
着するから、肉を云わずハ何人ひとりいことに、彼等異
教徒ハ死を光栄として、死を天国に到り神の膝下に
るものとして之のを喜人に、陛下を憂刑を満ぬとしたハ之
人を羨み、或ハ自から進んで刑場に赴き刑に服
しとしたものあつに住び、個地を霊的心理に到
ては肉体的トーナメントし何人の効力が無かつた、

流石に十年間も奥義徒の乱弾に腐心せし有様
と云ふ事があつて仏隊の法を改め比、其多分は変し
く坪崎塚士の切支丹の迫害に義士を多く学ぶ初の
紛々し比かりこの略するが、およそ自己の思想
恐るべき力をあらはすあり、決死隊の表現
こるべきの如き、丸山古来宗教戦の不と復到るあり無い
島原の乱の如き、百姓一揆と最初は難もあれ比が、
決死の乱徒は支兵に新しく組まれ屈せず敵に松平
伊豆守信綱をして十二万の兵を率し島原城を
攻囲するもむつかし比の大砲数百の攻撃も容易に
かなく、一挙攻め落すこと出来ず、已むを得ず兵糧
攻をやつ比のみなりき。河内安宅陣船の砲力を藉り城

の背後から数十の大小の時鳥を撃し城
内の乱徒に笑いを、流石の伊豆も悩まされ
阿蘭陀の援を求め比し比、島原の乱は平
夷い比けれども実軍の死傷の多かつたことは
小説模倣の実義戦軍の悔る一例とせ
ねばならぬものである。

松崎貴の切支丹殉教記三夜連談、讀畢りて
北記を作る、初稿まるまるして不感記す

○坂間を通り寛政十二年武州芝山陽堂版の南
面招狂歌一冊を手に入れ一枚の摺物を得たり誓
印人中井敬子の四花を彫り白二個所に角の注記

きりよくく換すること北の狂歌を載せ、「氷」の題下の一首を敷不の祖父の詠なりと知られ、其歌へ

氷

武人宗雨氏

立田川とつる和歌の葉のもやう哉
氷も春の志ぐるとやすら

右の如くなれ、敷不の注記と掲げ、而氏俱に林氏徳右ゑつ兼乗江戸人未詳考左半俊満氏の狂歌以文化十四年六月朔日現行年四十八とあり

敷不の生代の履歴を知ることのうるめるとなれ敷不の生代の履歴を知ることのうるを一笑に堪へ入る、北侯説に八一トるり狂歌の心得至べきなり収めるなり

二月十三日記

十二行

○廣井一氏新文の字を略する時新潟に移行し始る最初の新聞なれ紀時代なることなるを知る人今なれ八真と隔世の感なり、北溪翁の士中の日干支あれ八明治五年の事なり、陽の新聞八其次年（六年）の移行なり、北溪翁は新潟学校の始出の人なり、北侯八余も入学しおりたれ、アメリカ在留名和氏とあるハ新原敬大巻氏なるとも未だ名和後の事なり余紀時代人に句読を授けられ、城後と称せるなり、陽の新聞に花柳界の消息を掲げたるなり、高時のハイカラを罵倒するところおかし

二月十三日記

官許

明治壬申

第壹號

北湊新聞

北湊一周新聞

新聞發行ニツケテ或人之ニ一歌ヲ授セリ曰

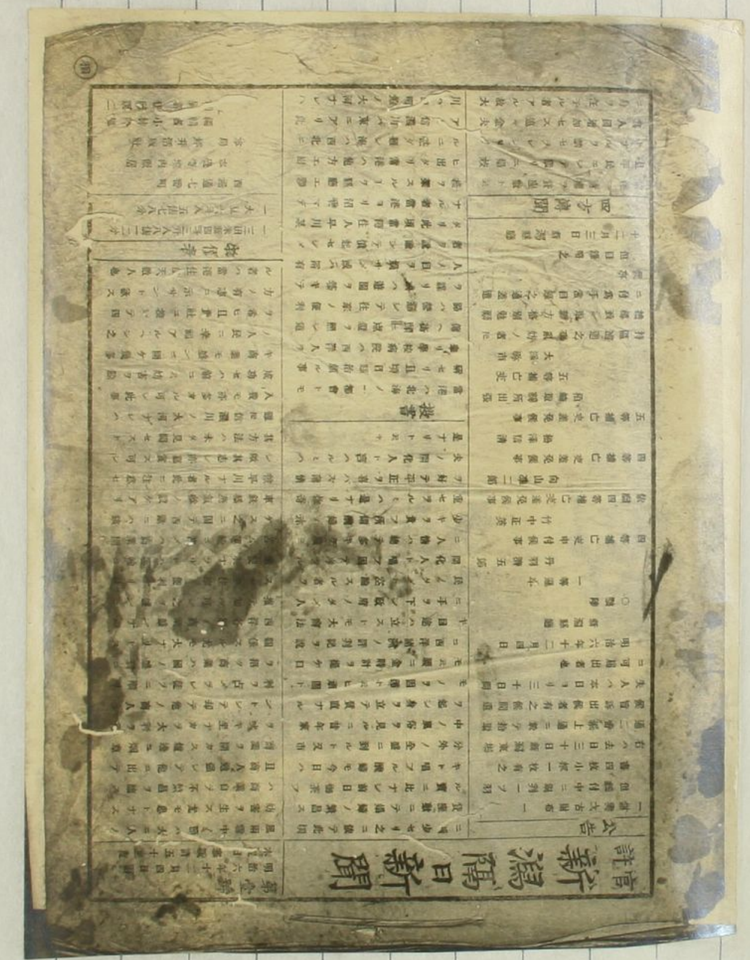
花ノ如榮ユル
御世ノ春ニアヒテ人ノ智モ開テソユク

新作ノ洋学技追々盛ニ、相成當春ハ寄宿生徒凡五十人余ニ及ヘリ仏語弁數学ノ科モ相立剪申候生徒得信機出来候少年三四人有之ヒニソノ掛リ役人ニ御

採用相成コノ後升々盛大ナランヿヲ人々之ヲ信用セリ

若松縣御貢米東京商社エ御委任ニ付追マ五万俵丈ケ當地ヘ川下ケノヨシ出張ノ者ヨリ知告アリ

アメリカ在留名和氏ヨリ贈リシ書ニ北越之急務ハ洋學ヲ開クト東京迄鉄路ヲ造リ運送便利ナラシムルニアルヘシ云々余ハ長文ナレハ他日出板スヘシ



○博文館と精美堂とを合併して共同印刷所と改称する今社の奮働争激は一ヶ月に亘つて今為解決せず、中載小勉強にて、今社側は極力頑張り、一歩も假さゞる状にあり、博文館及精美堂のさきに本社の争議の際、同業連盟に加入せざりしことにて、大橋新太郎氏無禮の言を放ち、同業連盟の時代錯誤なる、同業者の悪感を惹しなるか、今は無援孤立にして七苦八苦の境遇に陥り、○今に於て大橋は果してみずの感かめる、博文館二社は同盟に加はらんとするなれども、去るにても連盟に苦しかりしも彼れうれしき改革

十二行

を行ひしとせば、連盟の事なる影響者と改る大なるものあらんか、思へば連盟の為の彼等が加盟せざりしは寧ろ幸とも云ふべき歟共同印刷所の評議は本社の協定を必要倒産と云ふ評議の端をひらけり、今社は本社の親立を解体せしなる の契とせず、殊にアナーキストが工場内に集をなし共産主義に用ひ掃除を断行しなるなり其の結果は北海道新聞の如き都市に載する不の如くして、事前に発覚の経緯なるものを実に戦争は失業を夏にて極力運動してある其の所なる本社がさきに任廉しなることと大阪

年に三十萬圓を越す
市内のおこも奬勵費
貸家を持つたり妾を置いたり
勤め人顔色なしのこじき商賣
過まつた慈善の涙

日本第一位のこじきの巣くつは何といつても東京市だ、隣接の郡部を加へると日本のこじきの半分が集まつてゐる譯で、警視廳がうの目たかの目で追つ拂つてゐるに拘らず市内だけに日本中のこじきの三分の一がうごめいてゐる、市の統計課では昨年來躍氣となつてこじきの調査を始めたが

けふは濟草、明日は御茶の水と流れ渡つてゐるので手にあへず、こじき係はこう〳〵確實の數字がつかめないでさじを投げてしまつた、その結果によると

市内には三百五十人位の浮浪人があり、また二千名以上の公私の救助を受けてゐる者があるが折紙つきのこじきは約百名ありその中女乞食は十名足らずのよほどは婆さんで、ほとんどこじきの世界は男の天地だ

その理由は女はこじきになるまでにほとんど白首に化けて了ふので共白髪まで連添つた女房こじきか、でなければ私娼になれない晩年の不潔者かに限られてゐるからである、男は皆浮浪人上りで、根性の惡い者は泥棒になり、働も出來ないといふ意氣地のない者がこじきになるのである、東京のこじきには

二つの階級があつて、最上級は『ツケ』といつて飲食店の殘飯をもらふのであるが

ちやんとこなは張りを持つてゐて一歩も他人の餐入を許さない、そして自分のなは張りのお得意の店先を毎朝掃く事を義務と心得て居り、これが約三十人ある、中流階級は『ダイガラ』で塵箱に棄てられた腐つた殘飯を平氣で漁り食ふ手合ひでこれが五六十名、次は別に一定の生活方法がなく、行き當りばつたり式である

ところがこじきの中には富川町の木賃宿に六疊の間を借切り毎月三十圓以上の

宿屋の支拂ひをしてゐる小ブルジョア式のものがあるかと思ふと、驚嘆には妾を持つてゐる大ブルジョアこじきがあつて妾がかせいだもらひ錢で日那こじきは時々勞働者連の處へ賭博に出かけるといふのがある、モツト驚かされるのは三河島のこじきで借家を數軒建てゝゐる者がある事だ

この珍現象はだま眞にこじきの救濟策が講ぜられず

ぼろを着てさへゐると一も二もなく現金や品物を惠んで市民がこじきを奬勵するやうな結果になるからで、その、こじき奬勵費が少くとも年額三十萬圓を突破してゐる見込みで、しかも大部分は僞物の贋藥こじきのふところに入つてゐるといふ事が判つた

投げ錢代りの新案小切手
十五日ドイツから届いた職業こじき退治の妙法

こじき救濟政策のまだ立たないこのこじきの都にさつて、東京と同樣いまこじき滿員のドイツハンブルヒ市から東京市樞内の某氏の許へ、十五日珍らしい小切手を贈つて來た、それは

最近同市で變行された慈善小切手で、大戰の結果素晴らしくこじきが殖り閉口した同市では職業こじきを退治して眞のこじきを救濟するため三マーク（我國の約一圓四十一錢）を役所に納めると、四十枚の慈善小切手をくれる、そしてこじきが來た場合は決して現金や品物を與へないでこの小切手を惡んでやるのである

するこもらつたこじきはそれを役所に持つて行き、役所の

係員は果してそのこじきは救濟の必要があるかを調査した上出來る限りの救濟を、その小切手から得た救濟資金によつてやるといふのである

また十二月十五日から一月十五日まで四週間の慈善郵便切手を變行して定價の二倍に賣りつけその半分は慈善事業の資金に當てる事にしたがその成績は非常に良かつたといふ事である

モンロー博士來朝す
夫人同伴でけさ横濱へ

【横濱電話】十六日午前十一時横濱着のプレシデント・ゼファソン號で米國コロンビヤ大學教育學部長パール・モンロー博士が婦人同伴來朝した

博士は日本支那及び印度・ペルシヤ等における米國人學校の實情を視察し併せて今回支那ペルシヤの在住米國人教育家によつて提唱せられた新教育法實施に伴ふ基本金募集の件を打合すため來訪したものである

【飛行船帝都訪問】【土浦電話】霞ケ浦航空隊一型四號飛行船は十六日の速力試驗を延期し帝都及び横須賀方面訪問飛行も十八日に決定した

Wohlfahrisscheck A 93997

Gehen Sie mit diesem Schein zum Hamburger Wohlfahrisscheckdienst, Dammtorwall 10, geöffnet werktäglich 9—2 Uhr. Wenn Sie selbst nicht dazu imstande sind, können Sie auch Ihre Freunde oder Angehörigen schicken. Ihre Notlage wird vom Wohlfahrisscheckdienst unverzüglich nachgeprüft und Ihnen nach Möglichkeit Hilfe gewährt werden.

Außer d[illegible] Schein sind auch Ihre Papiere mitzubringen.

Nach[illegible]

Bitte wenden!

慈善切手のツイド

【說明】上は本文中のハンブルヒ市でこじきに與へる爲に作つた小札、下はツイド政府の慈善切手

同じく、社会党が特殊人士と共に今私と戦ふの所以は第
二多数の共産者を出すのみならず、アナーキストと
の本質を共にし、其の主義の清者に関するものを
以て、今私の迫害を蒙ること、今は或る程度
まで事業を西洞院の前面に面倒あるべ
し、大橋の府廳よりもやはりさるべ
し、至りの既往に於ける彼の無禮を怒ること長く
其の場所の能はざるを新たに同情を禁じ得ざるの
あり、爰に其の概略を記して、聊か
附記するこゝろとなり

二月十七日記

十二行

聲明書

弊社ハ出版勞働組合ニ加盟スル職工ノ跳梁跋扈ノ積弊ニ堪ヘズシテ去月二十日臨時休業ヲ發表スルノ餘儀ナキニ到リタル顚末ニ付テハ不取敢同月二十二日附ヲ以テ得意先從業員並ニ大方諸賢ノ前ニ衷情ヲ披瀝スル所アリタリ爾來會社ハ當初ノ方針ニ從ヒ準備ヲ調ヘ二月一日ヨリ一部工場ノ作業ヲ開始シ目下平版部七分活版部四分通リ機械ノ運轉ヲ見ルニ到レリ然レ共爭議團幹部ハ今回ノ事件ヲ以テ組合勢力ノ浮沈ヲ決スルモノトナシ必死ノ運動ニ依リ宣傳、示威、脅迫、暴行等アラユル手段ヲ須キ多數善良ナル職工ノ工場復歸ヲ妨害シ日ヲ重ヌル三週日ニ及ビタル今日尙社會注視ノ的トナリ一面復歸ヲ希望スル多數職工ノ生活ヲ脅威シツヽアルハ會社當局トシテ憂慮ニ堪ヘザル所茲ニ其後ノ經過ノ一班ヲ叙シ大方ノ了解ヲ仰グ所以ナリ

第一、事件ノ緣由及ビ動機

右ニ付テハ曩ニ其一般ヲ叙シタレ共經緯ヲ明ニスル爲メ重ネテ左ニ略述センニ

(一)會社ハ從來數次ノ爭議ニ際シ其營業主トシテ定期刊行物ノ委托工業ヲ取扱ヘル關係上每ニ勞働組合ノ要求ヲ認容シテ得意先當而ノ損失ヲ避ケザルヲ得ザリシ立場ニアリキ是レヤガテ一面ニハ勞働組合ノ勢力ヲ助長シ職工ヲ怠慢懶惰ニ導キ一面ニハ賃金ヲ世間並以上ニ增額セシメ事業ノ採算ヲ見ル能ハザル迄ニ作業ノ能率ヲ低下スルニ到レリ

(二)勞働組合ノ勢力助長スルニツレ彼等ハ組合ノ背景ニ據リテ職工個々ノ雇傭關係ニ迄容喙スルニ至リ一般景氣ノ消長事業ノ繁閑ニ依リ冗員ノ按配ヲナスベキ企業上當然ノ處置モ會社ハ爭議ノ端ヲ發スルヲ顧慮シテ容易ク手ヲ下スコト能ハザル狀態ニアリキ

(三)右ノ如キ禍根ニ厄セラレ會社ハ昨年中既ニ事業トシテ立チ行カザル迄ノ窮地ニ陷リ屢職工ニ對シ共存共榮ノ趣旨ヲ力說シテ其反省ヲ求メタレ共勞働組合幹部ハ共產主義ヲ奉ズル者ニシテ資本主義制度ヲ呪咀シ現代ノ產業組織ヲ破壞セザレバ止マザル底ノ極端ナル思想ヲ有シ此理想ノ下ニ組合員ヲ統率セントスルモノナレバ根本ニ於テ會社ノ方針ト兩立シ難ク會社當局ハ國家產業發達ノ前途ノ爲ニモ甚ダ憂慮スベキコトナルヲ思ヒ屢彼等ノ覺醒ヲ促シタレ共不幸ニシテ皆終ニ徒勞ニ歸シタリ

(四)偶鐵工、鑄造、貯品三科操業短縮問題ヲ動機トシ組合幹部ハ常套手段ヲ以テ全職工ヲ煽動シ示威並ニ怠業運動ヲ開始シタルヲ以テ會社ハ一月二十日朝作業ノ危險ヲ慮リ臨時休業ヲ發表スルニ到レリ同日午後職工代表ハ十個條ノ要求書ヲ提起シ來リタレ共重役及幹部社員ヲ排斥シ曩ニ懲戒處分ニ依リ解雇セラレタルモノヽ復職ヲ要求スルナド反省ノ色ナキヲ認メタルヲ以テ會社ハ茲ニ最後ノ決心ヲナシ翌二十一日全職工二千二百名中組合ニ加盟スル者千八百餘名ニ對シ社則ニ依リ解傭スル旨ノ通知ヲ發シタリ

第二、解傭者ニ對スル處置

(一)復職ヲ希望スル職工ニシテ銓衡ノ上穩健ト認ムル者ハ之ヲ採用シ此際退職給與金ヲ支給セザルモ從來ノ勤續年數ヲ通算スルコトヽシ

(二)其他ノ解傭職工ニ對シテハ工場規則ニ規定セル退職給與金相當額ヲ支給スルコトヽセリ

第三、臨時休業以後ノ經過

(一)爭議團ノ戰法　組合幹部ハ過去數次ノ爭議ニ於テ能ク訓練セラレタル手腕ヲ有シ內ニ對シテハ多數職工ノ結束ニアラユル手段ヲ傾倒シ外ニ向テハ宣傳流言ヲ放テ社會ノ同情ヲ蒐メ陽ニハ職工ニ對シ飽ク迄最後ノ勝利ヲ標榜力說シ陰ニハ社會ノ各方面ニ向テ調停ヲ哀願懇請シ其志望ヲ遂ゲントス從順ナル多數職工ノ集團結束ノ亂ルヽコトハ彼等ノ最モ恐ルヽ所ニシテ此等穩健分子ノ工場復歸ヲ妨グル爲メニハ威嚇、激勵、煽動、欺瞞等アラユル手段ヲ盡シ手ヲ代ヘ品ヲ代ヘ爭議以外餘事ヲ靜思スル暇ナカラシム其手段ノ主ナルモノヲ列記スレバ

イ、出席點呼　爭議以來小石川クラブ神明クラブ其他數個所ニ事務所ヲ設ケ出席簿ヲ備付ケ每日必ズ一定時ニ集合セシメ出席者ヲ點呼シ不參者アレバ其家庭ヲ訪問シ其居所ヲ追及シテ離反ヲ防止ス

ロ、賃金及解雇手當ノ保管　爭議團ハ職工各自ヨリ委任狀ヲ徵シ一月三十日辯護士布施辰治氏ニ託シテ賃金一括交付方ヲ請求シ來リタレ共會社ハ之ヨリ先二十五日ヨリ各自ニ賃金支拂ヲ通知シ來社セザル者ニ對シテハ二十九、三十兩日ニ亙リ書留郵便ヲ以テ自宅ニ送附シ解雇者ニ對スル手當金モ同時ニ價格表記ヲ以テ夫々送附ノ手續ヲ運ビタル後ナレバ布施氏ハ其儘辭去セラレタリ然レ共右書留及價格表記ノ大部分ハ爭議團幹部ノ手ニ取纏メ保管セラルヽモノヽ如シ

ハ、通勤阻止　工場ノ通路ニ當ル辻々ハ勿論電車停留場若クハ時ニ要路「ステーション」ニ警備隊ヲ配置シ出勤者ノ阻止ニ當ラシム、豫テ武藏飯能在ニ避難セル平版課生徒ノ一團自働車歸還ノ途中暴行ヲ加ヘラレ一部ハ空シク引戾サレシガ如キ其一例ナリ

ニ、家庭訪問　彼等ノ監視ヲ免レ工場ニ入リタル者ニ對シテハ其留守宅ヲ訪問シ家族ヲ威嚇シ時々暴行ヲ加フルコトアリ

ホ、宣傳及虛傳流布　宣傳ハ彼等ノ最モ得意トスル所ニシテ演說會ビラ撒布等苟モ社會ノ注意ヲ惹キ同情ヲ集ムル手段ヲ發見スレバ直ニ針小棒大ニ之ヲ發表シテ憚ラズ又多數從順ナル職工ヲ結束スルガ爲メニ彼等ニ有利ナル虛傳ヲ作爲シ群集心理ヲ巧ニ欺瞞スル手段ヲ用フ例バ會社ト組合幹部トノ間ニ何等ノ交涉モ開カザルニ不拘會社ヨリ妥協ノ申込アルヲ以テ數日ニシテ勝利ヲ得可シト宣傳シ若クハ某々有力者ノ調停進行中ナルヲ以テ兩三日ニシテ局面ハ我等ノ有利ニ展開スベシナド無根ノ事實ヲ誠シヤカニ演述シ正直ナル多數職工ヲシテ任意工場復歸ノ意思ヲ飜サシムルガ如キ一二ニシテ止マラズ

(二)會社ノ方針

イ、會社ハ時勢ニ鑑ミ一昨年以來職工ノ組織スル工場協議會、能率增進委員會、購買組合組織ノ管理等ヲ認許シ勞働組合ノ自治的發達ト其助成ニ努メタリ不幸ニシテ此理想ハ悉ク裏切ラレ反テ自他ノ福利ヲ破壞スルノ禍因ヲナシタリ會社ハ此ノ辛キ經驗ニ鑑ミ過激ナル組合ノ存在ハ企

至リ一般景氣ノ消長事業ノ繁閑ニ依リ冗員ノ按配ヲナスベキ企業上當然ノ處置モ會社ハ爭議ノ端ヲ發スルヲ顧慮シテ容易ク手ヲ下スコト能ハザル狀態ニアリキ

(三)右ノ如キ禍根ニ厄セラレ會社ハ昨年中既ニ事業トシテ立チ行カザル迄ノ窮地ニ陷リ屢職工ニ對シ共存共榮ノ趣旨ヲ力說シテ其反省ヲ求メタレ共勞働組合幹部ハ共產主義ヲ奉ズル者ニシテ資本主義制度ヲ呪咀シ現代ノ產業組織ヲ破壞セザレバ止マザル底ノ極端ナル思想ヲ有シ此理想ノ下ニ組合員ヲ統率セントスルモノナレバ根本ニ於テ會社ノ方針ト兩立シ難ク會社當局ハ國家產業發達ノ前途ノ爲ニモ甚ダ憂慮スベキコトナルヲ思ヒ屢彼等ノ覺醒ヲ促シタレ共不幸ニシテ皆終ニ徒勞ニ歸シタリ

(四)偶鐵工、鑄造、貯品三科操業短縮問題ヲ動機トシ組合幹部ハ常套手段ヲ以テ全職工ヲ煽動シ示威並ニ怠業運動ヲ開始シタルヲ以テ會社ハ一月二十日朝作業ノ危險ヲ慮リ臨時休業ヲ發表スルニ到レリ同日午後職工代表ハ十個條ノ要求書ヲ提起シ來リタレ共重役及幹部社員ヲ排斥シ曩ニ懲戒處分ニ依リ解雇セラレタルモノヽ復職ヲ要求スルナド反省ノ色ナキヲ認メタルヲ以テ會社ハ茲ニ最後ノ決心ヲナシ翌二十一日全職工二千二百名中組合ニ加盟スル者千八百餘名ニ對シ社則ニ依リ解傭スル旨ノ通知ヲ發シタリ

第二、解傭者ニ對スル處置

(一)復職ヲ希望スル職工ニシテ銓衡ノ上穩健ト認ムル者ハ之ヲ採用シ此際退職給與金ヲ支給セザルモ從來ノ勤續年數ヲ通算スルコトヽシ

(二)其他ノ解傭職工ニ對シテハ工場規則ニ規定セル退職給與金相當額ヲ支給スルコトヽセリ

第三、臨時休業以後ノ經過

(一)爭議團ノ戰法　組合幹部ハ過去數次ノ爭議ニ於テ能ク訓練セラレタル手腕ヲ有シ內ニ對シテハ多數職工ノ結束ニアラユル手段ヲ傾倒シ外ニ向テハ宣傳流言ヲ放テ社會ノ同情ヲ蒐メ陽ニハ職工ニ對シ飽ク迄最後ノ勝利ヲ標榜力說シ陰ニハ社會ノ各方面ニ向テ調停ヲ哀願懇請シ其志望ヲ遂ゲントス從順ナル多數職工ノ集團結束ノ亂ルヽコトハ彼等ノ最モ恐ルヽ所ニシテ此等穩健分子ノ工場復歸ヲ妨グル爲メニハ威嚇、激勵、煽動、欺瞞等アラユル手段ヲ盡シ手ヲ代ヘ品ヲ代ヘ爭議以外餘事ヲ靜思スル暇ナカラシム其手段ノ主ナルモノヲ列記スレバ

イ、出席點呼　爭議以來小石川クラブ神明クラブ其他數個所ニ事務所ヲ設ケ出席簿ヲ備付ケ毎日必ズ一定時ニ集合セシメ出席者ヲ點呼シ不參者アレバ其家庭ヲ訪問シ其居所ヲ追及シテ離反ヲ防止ス

ロ、賃金及解雇手當ノ保管　爭議團ハ職工各自ヨリ委任狀ヲ徵シ一月三十日辯護士布施辰治氏ニ託シテ賃金一括交付方ヲ請求シ來リタレ共會社ハ之ヨリ先二十五日ヨリ各自ニ賃金支拂ヲ通知シ來社セザル者ニ對シテハ二十九、三十兩日ニ亙リ書留郵便ヲ以テ自宅ニ送附シ解雇者ニ對スル手當金モ同時ニ價格表記ヲ以テ夫々送附ノ手續ヲ運ビタル後ナレバ布施氏ハ其儘辭去セラレタリ然レ共右書留及價格表記ノ大部分ハ爭議團幹部ノ手ニ取纏メ保管セラルヽモノヽ如シ

ハ、通勤阻止　工場ノ通路ニ當ル辻々ハ勿論電車停留場若クハ時ニ要路「ステーション」ニ警備隊ヲ配置シ出勤者ノ阻止ニ當ラシム、豫テ武藏飯能在ニ避難セル平版課生徒ノ一團自働車歸還ノ途中暴行ヲ加ヘラレ一部ハ空シク引戾サレシガ如キ其一例ナリ

ニ、家庭訪問　彼等ノ監視ヲ免レ工場ニ入リタル者ニ對シテハ其留守宅ヲ訪問シ家族ヲ威嚇シ時々暴行ヲ加フルコトアリ

ホ、宣傳及虛傳流布　宣傳ハ彼等ノ最モ得意トスル所ニシテ演說會ビラ撒布等苟モ社會ノ注意ヲ惹キ同情ヲ集ムル手段ヲ發見スレバ直ニ針小棒大ニ之ヲ發表シテ憚ラズ又多數從順ナル職工ヲ結束スルガ爲メニ彼等ニ有利ナル虛傳ヲ作爲シ群集心理ヲ巧ニ欺瞞スル手段ヲ用フ例バ會社ト組合幹部トノ間ニ何等ノ交涉モ開カザルニ不拘會社ヨリ妥協ノ申込アルヲ以テ數日ニシテ勝利ヲ得可シト宣傳シ若クハ某々有力者ノ調停進行中ナルヲ以テ兩三日ニシテ局面ハ我等ノ有利ニ展開スベシナド無根ノ事實ヲ誠シヤカニ演述シ正直ナル多數職工ヲシテ任意工場復歸ノ意思ヲ翻サシムルガ如キ一二ニシテ止マラズ

(二)會社ノ方針

イ、會社ハ時勢ニ鑑ミ一昨年以來職工ノ組織スル工場協議會、能率增進委員會、購買組合組織ノ管理等ヲ認許シ勞働組合ノ自治的發達ト其助成ニ努メタリ不幸ニシテ此理想ハ悉ク裏切ラレ反テ自他ノ福利ヲ破壞スルノ禍因ヲナシタリ會社ハ此ノ辛キ經驗ニ鑑ミ過激ナル組合ノ存在ハ企業ヲ破壞シ延テ職工ノ幸福ヲ奪フモノナルコトヲ信ジ會社今後ノ方針トシテ此際出版勞働組合員ヲ一掃シ工場ノ刷新ヲ計ラントスルモノニシテ解雇者ヲ復職セシムルノ意思ヲ有セズ此ノ會社ノ方針ニ付テハ穩健ナル職工ノ多數ニ對シ既ニ屢之ヲ宣明シタル所ナレ共今尙爭議團ノ爲ニ誤マラレ若クハ彼等ノ脅迫ニ依ル恐怖ノ爲メニ其自由意思ヲ拘束セラレ未ダ復職ノ申出ヲナサヾル者アルヲ以テ之等ノ者モヤガテ工場滿員ノ曉ハ復職ノ時機ヲ失フベキヲ慮リ重テ會社ノ方針ヲ繰返ス所以ナリ

ロ、爭議調停問題ニ付テハ主トシテ爭議團ノ宣傳ニ依リ時ニ新聞紙上ニモ散見シタル所ナレ共事實調停ノ申出ヲ受ケタルハ小石川區內ノ諸賢數氏ニ過ギズ會社ハ右有志ノ御好意ニ對シテモ會社ノ根本方針上爭議團トノ間ニハ妥協ノ餘地ナキ旨ヲ述ベ之ヲ辭退セリ

會社ハ此度ノ改革ヲ徹底的ニ斷行シ再ビ斯ル不祥事ヲ繰返サヾランコトヲ期シ茲ニ重テ其決心ヲ聲明ス

大正十五年二月十二日

共同印刷株式會社

專務取締役　吉谷專吉

○昨日神田の唐本屋を漁り得る所の目録左の如し

一 百川学海 後集 十六冊

此書詩佛の手写本にて各巻に印記あり又徒に叢書注あり、正集を闕ける中の孫とまし秋田侯の祝本中より出づ

一 文章辨体 一冊

中林佛岡自筆を改刻したるもの

書屋七十四沖淡志とあり佛岡に書数種あり皆自筆を刻す

何れも独逸して備敵のものとす此書は東都の人と見たる石のものなり北山紀聞南畫の本録を説き池大雅を賞揚す一見家あり畫論を佛岡に沖漢と名つけたる意は如何を北の高論に就て知ると得たり

一 離騒九歌図 一巻

海傑の畫を刻したるもの巻尾に左の識語あり

庚子桂月傚陳志蓮筆

長州海傑玉瀛寫

描法を在京の頃より刻者に示し刻者に森伯白
虎也北書今幾人と流布するに
架中の珍とすべしと

○東京堂らも所流文学名著全集の内博徒道
の小説神髄刊行するにあたり一部学者に求む巻尾に
道遥と余との当時の往復書簡を収めたり余の漢の
手稿四文学の中唯載せたるもの故掲載せり六一
稿自ら二あり東京の西成学校教師の言葉を
収むこれを今得ざりしが偶つかしき
思を為す道遥の書生気質に出づるに
して出版するに余の漢詩を徴さんとの思出や曾

つて一稿日高谷を訪ひきたる折井伊基峯と香也
気質を演ぜしめたることなどを語りたりしが其の折
迎章として其の頃の紅詩を印刷して附したこと
があるとのこと考へて森鷗外の次歌の詩の自分
の手に入りしとある是の詩を巻末に収めたるを
あつて北涙宮をつと元らしめ北涙宮をつ
出版するに元ひあるを

二月末の録

○梅ひ得る中村竹洞の文書漢詩を後の竹洞
が池無名に傾倒するの甚だ深きを見る左に数節
をあげす

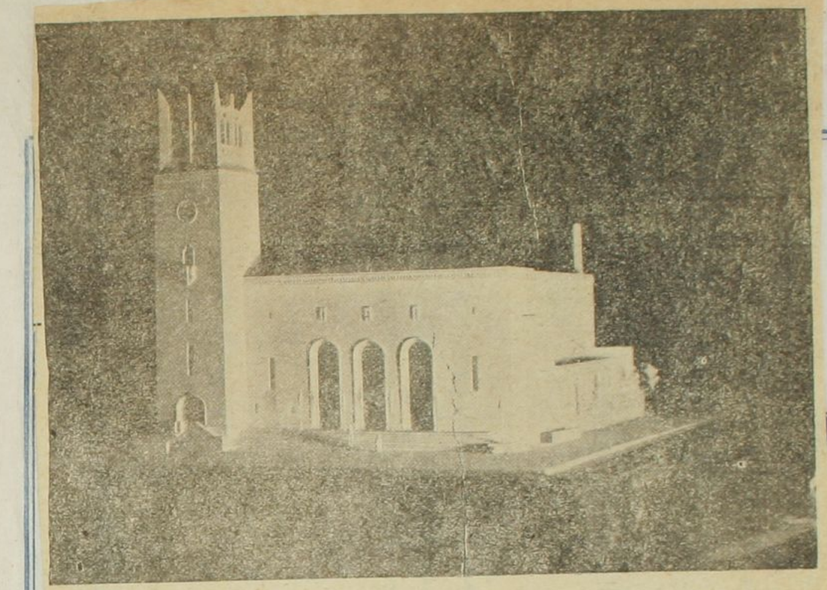
一南宋の画是を頃恬の深くひとあるを拙筆
難解言ふべしとも恬解する能あるかを

元の陳簡齋墨梅の詩に曰く言生不求顏色似前身杜馬九方皋山時獨立能比意知解者平生池無名の池無名なり池公逸顏曉朗骨氣風流を脫せり吾人の及ばざる所なり所謂後人のよく變ずること能はざるを恐れんと先自變ずるものなり

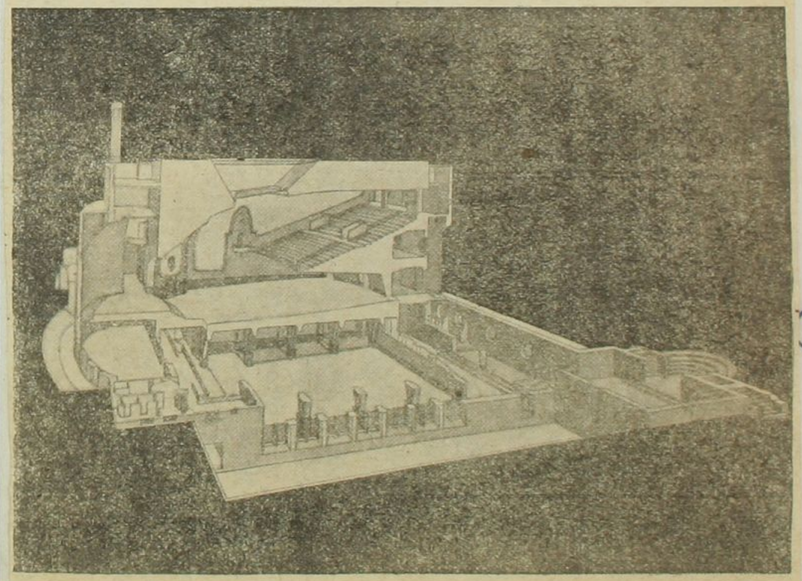
一 黃藤山人曰、世士人の書を學ぶこと甚だ苦墨卵硯をいとなむ、其沖濟の氣ありるを以てなり、余恥ずかしいまだ其沖濟の段を去ることを能はず沖濟を稱して自ら期す、然れども天性其沖濟の氣ある者池公のみ、此人天性寡欲にして生涯の想あり、余等の方一を学ぶのみなることを思ふ事多し

一 寶曆のころ秋南海先生初て文人書を唱へ柳里恭彭百川次之而して池大雅に及び次いで又来泊人伊孚九等閒世に出でいへり、大雅書くに不拘窮屈なるを以て工夫とせり、仙石曰、此人決無名と云人の書かけるに山水の畫あり、大雅此畫をも其書法の四隅に印かれる無名と改めんと語りさんき、さん心其不面の解素長斧劈の數の沈無名が法に擬せんとしまや、又吉徐法の趙左所書畫

十二行



故大隈總長記念大講堂の模型

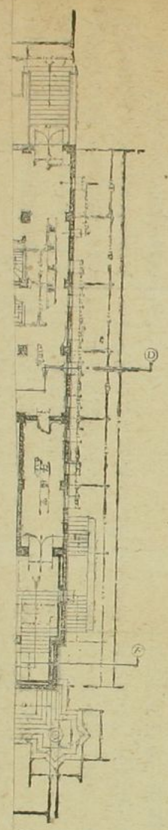


大講堂の縱斷面

故大隈總長記念大講堂の起工

（第一階に在る大講堂の平面圖）

故總長大隈侯の大人格を偲びその盛德を永く記念せんとする大講堂は、二月十一日の建國祭を期して着工さるゝことゝなつた。大正十一年の春、



（大正十四年十二月講演）

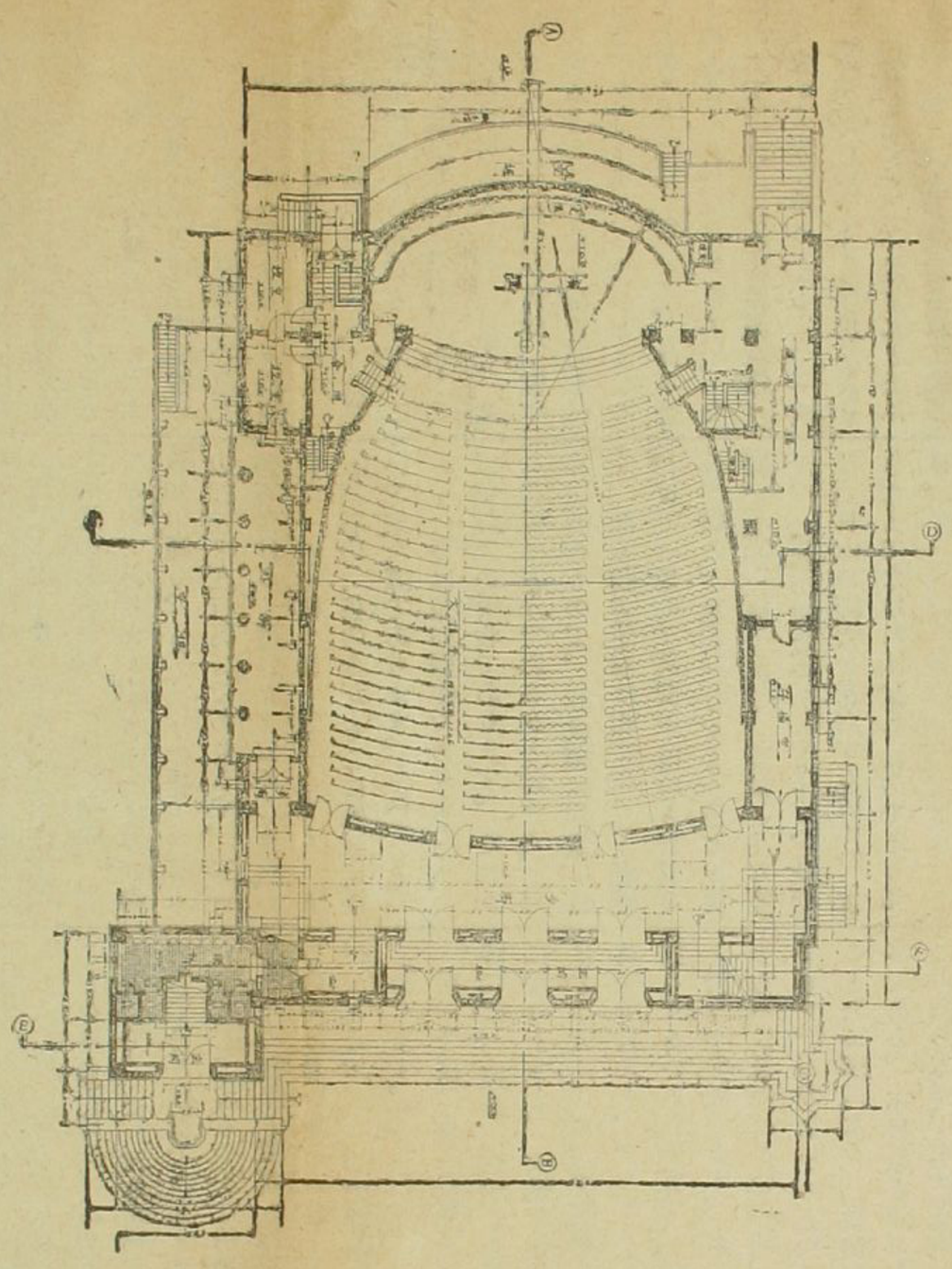
たいと思ひます。

最も著しいのは、是は總ての人が知つて居る通り、日本の經濟界の現狀と云へば、何であるかと云ふことを一口に申せば、不景氣だ、と云ふことが、一番現狀を言現はす適當の言葉であらうと思ふ。實際不景氣である。此事は今卒業をする方々は痛と、相當高い値段が致して居る。昨今少し安くなりましたが、日本の米の値段は安くなつても、今の遲羅や、あの邊の米の倍以上の値段を持つて居るのであります。さうして是が御承知の通り、日本の平年作と云ふものは五千五百萬石であります。五百萬石だけ多く獲れたと云ふことは、だけ經濟界の景氣が好くなつて來なければならぬ。然るに一方では如何なる人に聽いても、不景氣だと云ふことを申して居る。一般に不景氣だと云つて、それだけ痛切に體驗して感じて居る狀況であります。如何にも矛盾して居るやうな情勢がある。是は今の實際と學問と相矛盾して居れる、斯う云ふ時は景氣が好い。活氣があつて景氣が良いと云ふ事は何であるかと云へば、所謂需要が非常に多いと云ふ事である。活氣があつて即ち賣行さが盛である、即ち需要が多いと云ふ時は、景氣の好い時である。何故景氣が好いか、それは活氣があるから景氣が好い。併しそれます。不景氣の時には物は安くなる順序であります。さうして理論を經濟原理と言つて、問題があるでせうか、それが問題つて居れば、原理が問題つて居る。

故大隈總長記念大講堂の起工

（第一階に在る大講堂の平面圖）

故總長大隈侯の大人格を偲びその盛德を永く記念せんとする大講堂は、二月十一日の建國祭を期して着工さるゝことゝなつた。大正十一年の春、



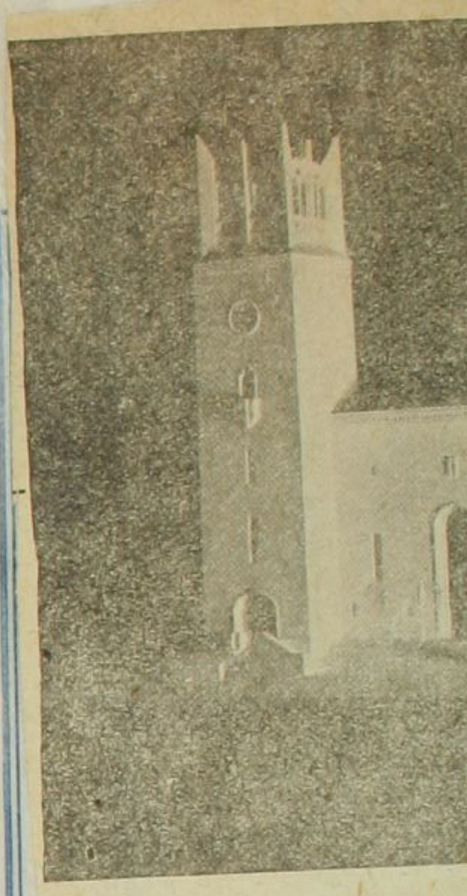
この企畫が發表されて以來、我が產業界の不況に加ふるに、近古稀れなる大震火災の慘狀に遭へるに拘はらず、各方面人士の熱烈なる贊助により、既に寄附金の申込は公募豫定額を突破した。これ、久遠の微笑を湛へる老公の英靈と俱に學園關係者の感激に禁へぬところであつて、同時に一日も速く巨人の一大象徵を具現するのが、我等の責務である。記念大講堂の設計は、豫てより敎授佐藤功一博士主務となり、內藤建築學科主任敎授をはじめ、岡田、吉田、今、上田の各敎授、黑川、大澤の各助敎授その他の人々が、材料、構造、意匠、裝飾から、音響、照明、衞生暖房などの各部を夫れぞれ擔當し、衆智を聚めて攻究中であつたが、先年、募集したる懸賞圖案をも參考として、既にその成案を得たのである。かくてこの設計に基づいて、建築工事は起工されるのであるが、その外觀及び內部の構造は本紙上の寫眞と平面圖とがこれを示してゐる。

◇　◇　◇

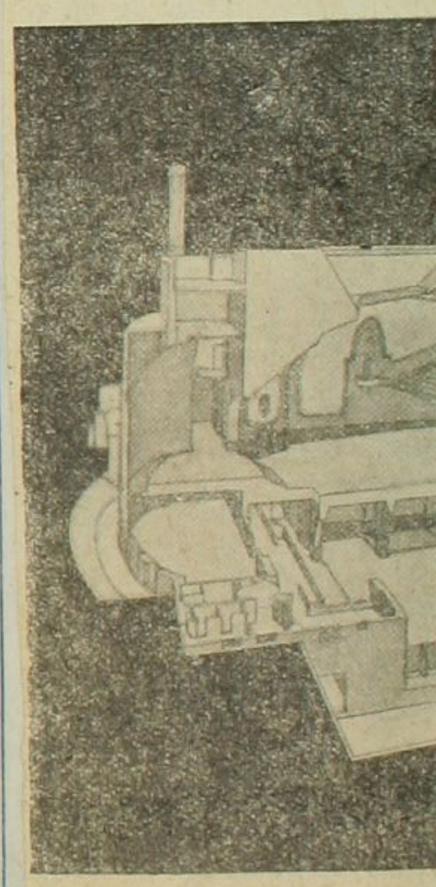
今、これを少しく說明すれば、大隈會館構內の一部に、本大學の正門と相面し、その間にユニバーシティー・スクエアーを挾んで建設さるゝのである。その間口約二十間、奧行二十六間、高さ六十尺、四階建總延二千坪、鐵骨鐵筋のコンクリート・ゴシック型、しぶ味あり美觀ある大建築の一端には高さ百二十三尺の高塔が、美しく聳え、これに時計とチャイム・ベンとが附けられる。

◇　◇　◇

その內部には、六千人を容るゝ大講堂と、二千人の中講堂とが、設けられ、演壇は特に舞臺としての使用に適する裝置となし、椅子にはナンバーを附し、その間を大小の步廊が織りなされ、三階には映畫室の設備もある音響と照明との新考案も本建築の一特色である。また、大講堂へは、夏は冷氣を冬は溫氣を通じて室內溫度の調節を計り、聽衆が心地よく居れるやうにする。內外の建築及び裝飾よく調和され、前面並びに大隈會館の書院に面した方のアーケードは、その一端の高塔を中心として莊嚴の美を現すのである。この大建築が學園の一表徵として早稻田の空をつくのは、大正十六年の秋で、我が創立四十五年記念式の日を劃してゐる。



堂の模型



斷面

十二行

山春暖の間に伏せり、是の大雅の舞義なるべしと
尾張の天拙先生和歌を、大雅堂遊
一家を為すといへども、曉らるる事ここ
一時獨り天あり池無名寡北天性家習
ども南宗の一流を脱かれて其奥旨をきはむ
実に是れ用ふべきあるべし、千古一人得がたきの丈
夫なり、南宗北等の人あることなし

○日蓮宗と不受不施流といふ分あつて、法華信仰の
の者の施物を受けず、又他宗の三寶を供養の事
他宗の信者に施與しないといふが此流の信條である
此、これハ文禄年中一宗都妙覚寺の日奥が主唱

したる所なり、豊太閤が大仏殿供養に参列序をよと
ふを峻拒したことがあり、徳川時代となりても武
家は幕府を手こづらせたり、其一例を挙げると伊勢
紙屋が紙を日蓮宗なるが故に衛つて二人の子から嫡男を二左衛
門と云ふ次男を六郎右衛門と云ふが此二男が紙屋の跡目を
奪ひあひといふは、これが毎年二月一日を以つて
行ふことになつてゐる日光御鏡石頂戴の式
に列する頂戴を拒んだのが動かぬ父も之
も八丈島に流罪に處せられたことがある。此の意
地張りの系統から後者を有く富樂が生れた
といふも珍しである、富樂家が後藤をやつ

ことや其の墓が阿波の徳島に現ることなどいふ珍文面須のことなどあるが、さて日光鏡石の儀式がそうく重いことあるにつけ、高義隆三著上世々未史、こたのことく記してある

二月朔日日光つ主法親王の宮様首座祭の登城あり、将軍上野寺院に出て、翌面す、天台一宗の僧侶、日光東照山の見代社家と司来り、この日を以て登城拝謁を賜はる、この日又日光宮御供餅頂戴の式あり、この鏡餅は四脚中城内御春屋にて調進、三物米十二俵つゝを一つゝして輸取に一行を日光へ送り、年始に神前に捧く

織田の後援上盛儀を以て江戸人特選より七日日光門主登城を機として頂戴のため行あり、三家この時に祝儀献上目録を登城席にて一片づゝの人員を送り帰て残餅は之を御目付指添にて紅葉山御供所井中に納るまを例とす

高義彦の日記あるを不受不施派の摩味がやかましくなる元禄頃以流の禁止さる明治九年まで其禁が解なんあるうに

○永い間委敷されてゐた宮樂の役者給が新音なる注意を惹いて来た、赤穂浪人の後を見ると、浪曲の様子見くる、誤信の別を深刻な風刺があるこの

やうな人々、うつくしいものを強て醜化してやうする人
（の、浮世絵の役者似顔絵）の一種因襲的の書
き振りがあり、他人も長くそれ慣れた目から之れ
を見ると、自異様な人々くるのが常態である、役者絵
を書いた多くの浮世絵師の前後一人もない、全く四外れの
者を描いたものの前後一人もない、全く四外れの
である、我邦人は一往役者絵といふものゝ型と因は
れてゐるから、能くその型を因襲して居る方の変へた宮樂の絵
を見て因感を心の中に得るのも理りであるが、外
人で浮世絵に巧者なものでも、最初はそれを去れはな
うの比、フエノロサもまたデカダン中のデカダンとして
知れ、宮樂の四生涯時代役者から恐れられたといふ説

十二行

もある位で宮樂は役者のアラを扶出すを儀事も
しかせへ云いんれのを無理はないが、実は宮樂のの
浮世絵は或る意味に役者と媚びたとも云ふ、役者
の似顔は有るべく似る様のつとめて書いたるれ者）
が、美化の窮り過ぎて神采を失つてゐる、全体役
者絵は婦人の九七割こそ性慾と関係があ
ら美化が著者の九七つとめた所で、舞台顔よ
りも錦絵の顔が甚しく美化さんれ、それが習慣と
なつて長い間画風を拘束してゐる因習的の
型を脱つて、而るそれを破つたものは北宮樂である
宮樂の絵は必ずしも宮實と云いんれず、目がなく

の境を用く、眉が逆立ち、いろ〳〵の言に誇張もある、
たかしどこかに神来曜如なる言があつて、俳優の
個性を発揮して為るとある。他の浮世絵家が列
座及び雖い妙があるに、誇張は言実に戻るのである
あるが、言葉の誇張は其の描くべき俳優の個性
を発揮する方便として誇張しておるのである、
普通の言実家は外面のみの言実をのみつとめ
るが、言葉い心の底まで言実をつとめるこ
かの如くに、彼らも亦言つてゐる様の思はれる、彼の
言実は微底的であるから、十人言いても百人言いても
悉く異つてゐて活動の氣がある、拙手の言
いたるまで似通ふ言がある、目や鼻や口のあ

しく異なる業を揮うて動かす面貌を変へ教ゆる目
的の俳優と似んハ言えんで可とするのであるが言葉の
書き方ハ言えんを落べらのようにあひまい、或人書いてい
ま〳〵書き通つてゐる、第一大切な面貌ハかりひて、手の宜
き言葉ハ無の為方をもつてゐるまひ皆ふ通つてゐる恰
も能文の士が人の傳を立つる其人異なれバ筆其業
段顛倒まひも全く異なる様の、言葉の書ハ為
ま豊富にあるに、役んハ識意と俳優と媚びる氣が
多く、かゝる俳優の画真骨頂を未だ描いてゐる、
彼んハ自家の藝術を婦女子の玩具つこ作ることを
屑しとせずこの如き和田堂なる。其故に画面
の美化を画とせしの大膳こ因習を打破しに

のみならず、

偶〻仲田勝之助著「音樂」を読み、その思
ふ所の一端を叙す、氏は著者と雷同せず
自分の音楽こそ最も偉とする所時流に媚いざ
ずに存り

此著者の記する所に拠んで外国で如何な音楽と
注意しなければならぬ事は大いに音楽を教育な
やしない人は猶之の「ジュリヤス、シルト」であるなれ
トは音楽を以つて世界的大音楽家なる二三の列に
加へて迄も尊ぶべきものとしてゐる

音楽の事蹟を研究してゐる人々の
くるべきが、やつと其の著が阿波の徳島市

十二行

に居られた市中東光寺に音楽一家のあるを
聞かれ居られたが、彼の徳島の富田紙屋敷
に住し、ここを市の東部で海岸に近い
東から東部に向の踊がある譯、彼の
家は能役者の系統で素多金剛と並び
称せられた春日流の家に属することが知れも
きた、艶麗とあり別踊があるやうな考へる
ものもあるが、これは別人であるとこと云ふ、
彼の創意であることと云ひ、雲母の塗りつぶ
しの背景は彼の創意であることと其前から
あることが研究家によつて明かにされた彼の
の画は古風な致もあるけれども寛政頃か

う書き出したと云ふ。ちるい人びとの宣ちゃ落世俗が蓮華蓮しに至るの間に知りた弥人びとの和撲俗を吉いたがそれも拔まるまで、画稿写荒平残つてゐる、長くく北人の画が注意を惹きそうに為めいくらあるこの外ハウキリしそれ、おのしる五十回に確かるあると云ひたゐる、北人の画ハまんべんと黄屋一手で敢すれ北人の後ろを一面と云ひたるまで　二月廿日記

○昨数業中、神田の上方屋に聖像の路傍を模写したものあるを見たから時ひ求めた、切支丹堂元祖の為め、コンナものを拾つて人に問ふまでも、其の為つぶやるう思やを換制するの便りとしたと云

十二行

が切支丹殉教記をも浜ちて毎の歳異を為へる折柄そんハ机上と見るく小説小、北の原為い帝室博物館の不為と偶り、内部の四面聖像のブロンズの高丈ハ原下寸大のも後枠ハ縮めしあり、中ル外廓ハまくて陶それ模写もしあり

○楠瀬日年来の書画米一幅出版つるミ部鶴ゝ、これも四幅くらも日年計画のあれ十カ〳〵凝つた高五の絵巻頭と金が吉高の説吉の扁掲げ、次幅の教科を と呼ぶもの値セいろ〳〵のものを元出した貸興セしやうと、左の数枚あり

一琉球版六諭演義　一山陽山陰名所図会（山田日と山陽誕生の宮）

〃研　屏　條紙

一黄石斎法帖　一高橋幕末絵図

一松浦武四郎一日墨水図　一文書　諸橋

右北等秋料に就て行き違ひ誤りを生じ時日に渡る、北の日年自刻の印一顆を京に高らしまつり賜ふ北刻者に与へ、図出の用印に充つべし

二月二十日記

文之

小精廬秘笈

附言　乙亥一号の巻首に夏目漱石の出来の由以下字句にうつさんと載せてある外に印人徐

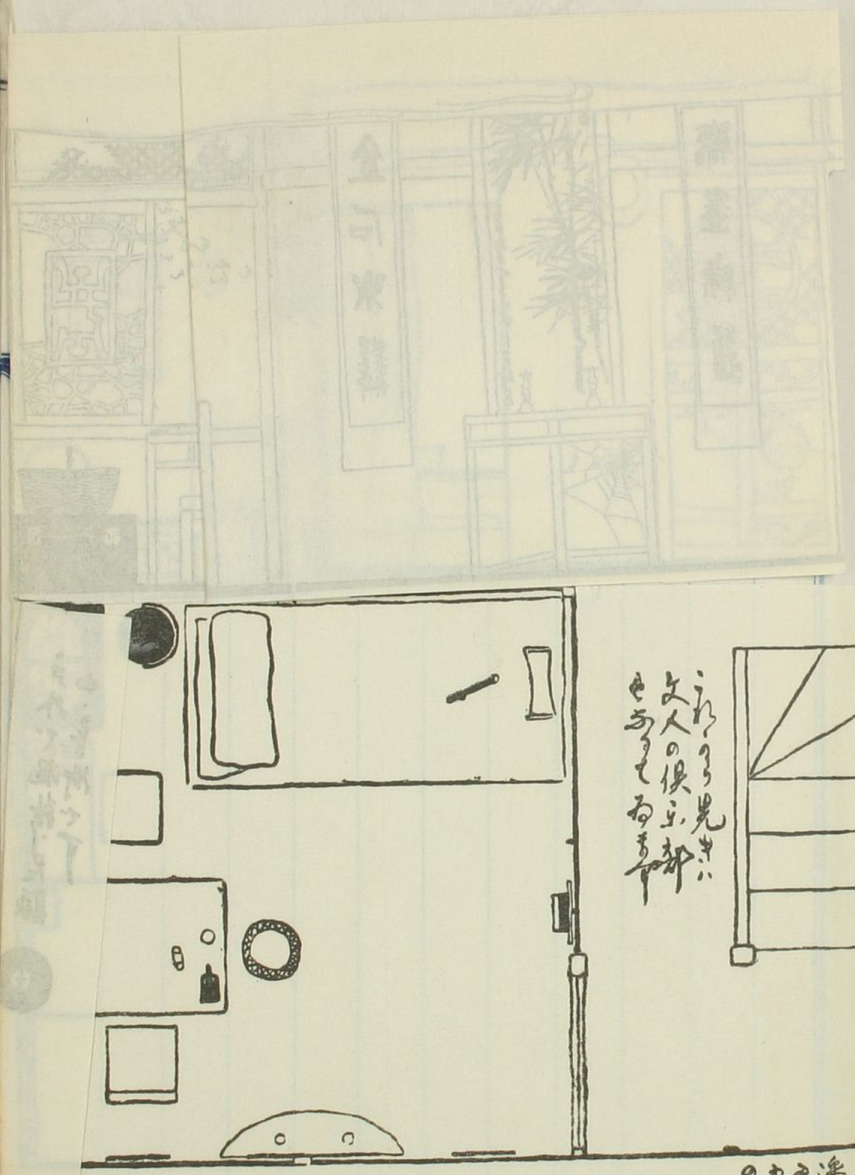
星州の方面が日年の手腕ひ起し図こうて
ある、海視愛宕石の雖の図を彩色にしたる
が収めてある、気芽に就て各々古文と説がある
そして余の書斎の説が全巻のよいを占め
てある、和氏摺りむ、標題を日年の書び器
体に書いてある、シナ能恐公寿命のあるこの
疑かしいが取味は深つてみる、傾い上手も
也

○貝合せ可ろう書く反故紙を張んで家から共の
趣味を感じてみる前年ザウト共の玩味と
就て書いて見ることもあつたが共の好い数して文
字手元ろうの、頃日美の図が余の取味法

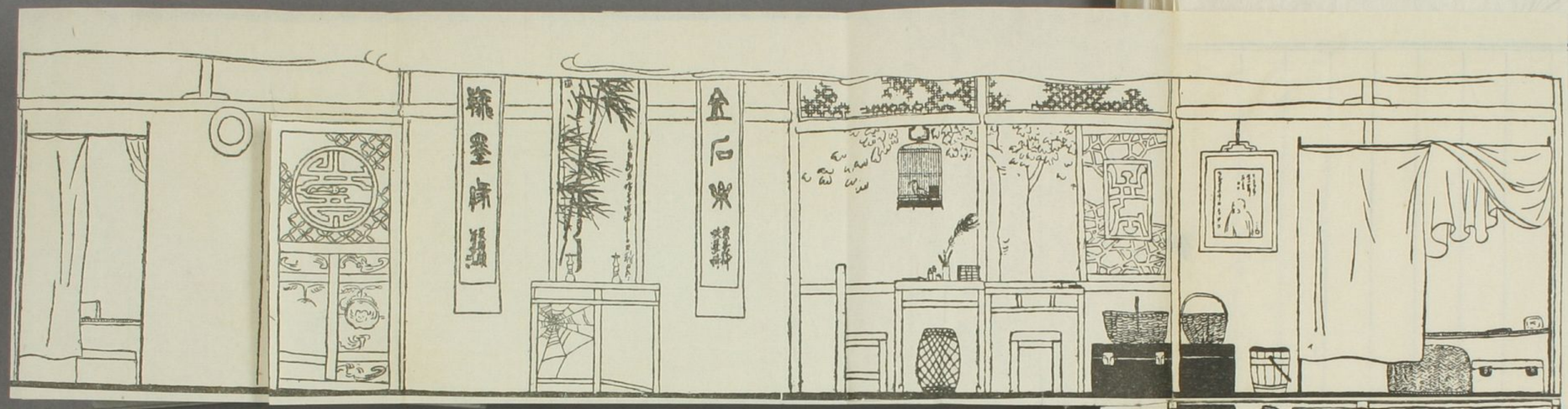
十四年を毎年續載し、いよいよ流しを五回目を及ぶ敗軍味と記し、前年ならば特々詩流しを書かせたりが三月帰に載らざるべからざるもの、モーパシ経めその他の随筆を入れて出版まつるべきこと

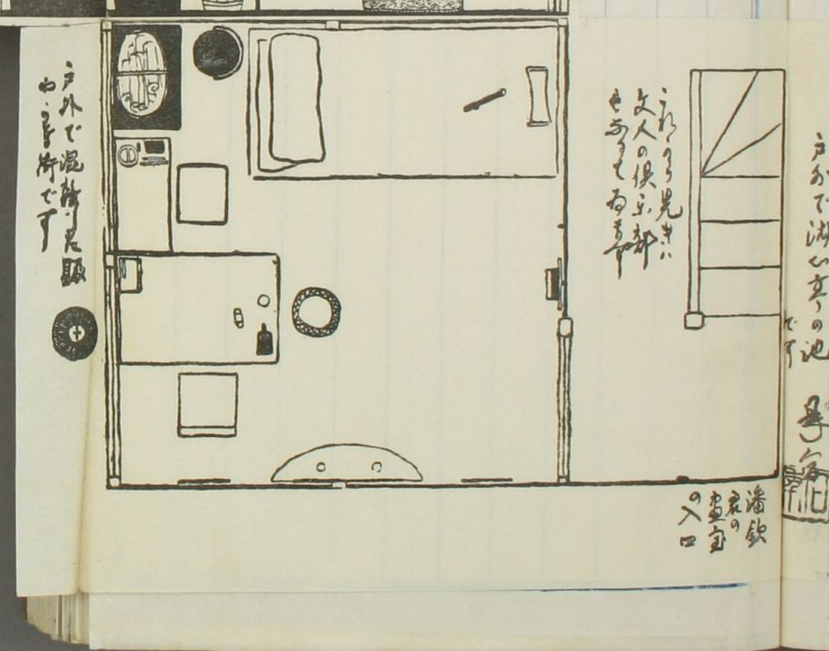
○前掲拙著前二冊を一冊に合の説を強り辺へ入れ、有まることとなりしに為め鎮助のものが出れからこれを張りつけおく、文後の二篇を旅行の首尾の体裁を示す為めこれをする、

二月廿一日記



戸ふで湖山亭の池





おこし絵

十二行

硯屏（宮殿）

玩具に表れたる文房具

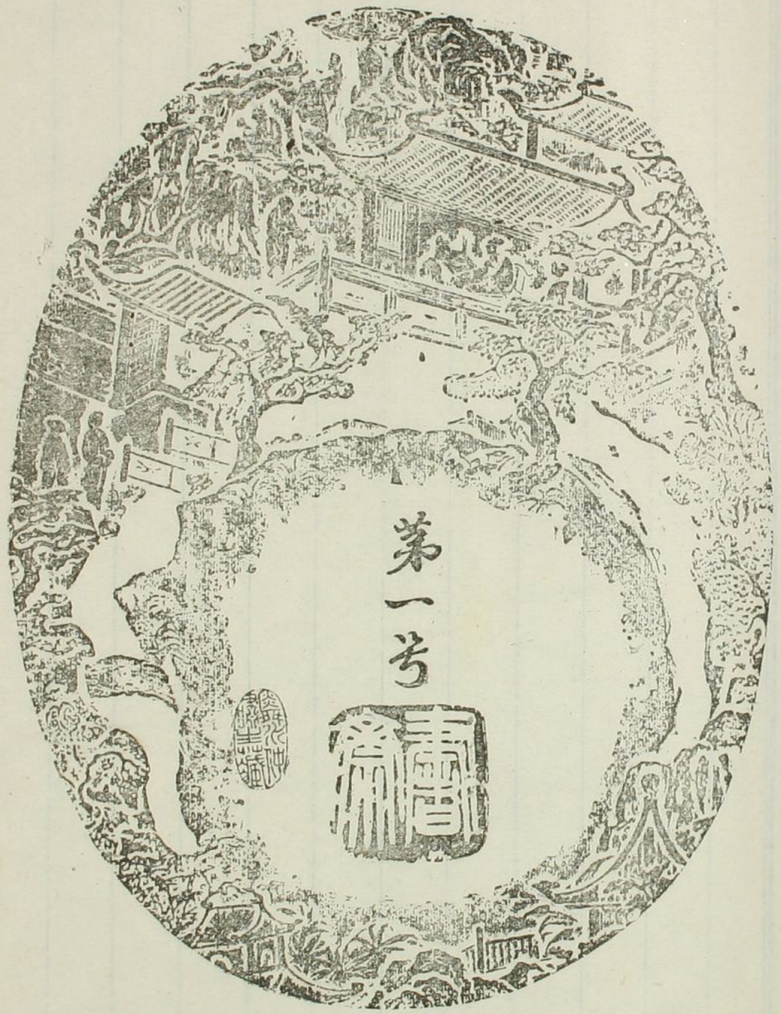
（一）愛宕硯

西澤笛畝

古い昔には重に瓦や陶器の硯を用ひたものらしい、雍州府志に、大佛殿南造瓦者燒之とある。韓退之の毛穎傳に硯を陶泓といつてあるのが陶硯だつた證據だともいはれてゐる。然し石硯も決して新しいものではない。日本でも龜山殿七百首の内、道我法印の歌に、

水莖のたよりも見ても石硯かたき契のはてぞかなしき

といふのがある。支那には硯に關する書籍が澤山あるであらう、米元章の「硯史」、撰者不明ながら南宋の人の著だと目せられてゐる「硯譜」高似孫の「硯箋」余懷の「硯林」などいろ〳〵あら



う、この雜誌に掲げられる硯工の談では宋硯と稱せられるものに日本の石があるさうだが、誠に面白い話だ。

それは先づ置いて、爲尹千首の中に寄硯戀と題し、

人心これや憂き世の嵯峨いしの筆と墨をもつくしはてつゝ

といふ歌がある。この嵯峨石が卽ち標題にかゝげた愛宕硯で、京都の西なる愛宕へ參詣する者の土產物として鬻いでゐたものである。口繪に出したのも其一つで意匠は種々ある上に彩色を施してあるところが如何にも子供への土產として適はしい趣向であると思はれる。

京都の周圍には月輪、高雄、高野川、加茂川など硯石の產地として知られてゐるが、この愛宕石もそれ等の石と共に石質至つて宜しい。何時頃から愛宕の名物として賣り出されたかは確證が無い。その裝飾の意匠に種々あることをいつたがその型も風字、斧、日月、松蔭、源順、猿面、菅公、圓形、式部、御琴形等の形式を應用して、殆ど千差萬別といつて宜しい。元來玩具として賣り出したものだが然し十分實用にも適し、且つその形式意匠は頗る味はふべきものである。

因に日本で石硯の古いのは洛西壬生寺に藏する忠岑形を第一とされてゐるが、好古小錄に載せてある紫石硯なども隨分古い物といふべきであらう。

本欄は書籍、文房具、書畫などの交換を希望せられる方がハガキにて、書齋社宛に申込み下さると、こゝに掲載いたしますが、發表後のことは各自直接御交渉願ひます。尚、返信を要方する場合は返信料を添附下されたい。

求　前田默鳳篇印文學一六。二二以降（書齋社内日年）
日本古代海賊に關する書籍（書齋社内靜生）

讓　市川米庵篇笙譜二五圓（書齋社内靜生）

定價

一冊	五拾錢	郵稅二錢
六冊	三圓	郵稅共
十二冊	六圓	郵稅共

◇誌代は總て前金に願ます
◇誌代受領は送本に依て御承知願ます
◇御注文には何月號よりと御指示願ます。
◇郵稅代用は一割增のこと。
◇振替にて御送金が一番御便利安全。替口座は東京七四三三五
◇廣告料は御照會次第御回答致します。

大正十五年二月十日印刷納本
大正十五年二月十五日發行

編輯兼發行人　東京市麻布區笄町一二六　立川幹

印刷者　東京市麴町區飯田町二ノ五〇　猪木卓二

印刷所　東京市麴町區飯田町二ノ五〇　京華社印刷所

發行所　東京市麻布區笄町一二六　書齋社
振替東京七四三三五
電話青山五〇三

○昨日神田の古庚を二三の同書を繙く　二月廿三日の記

一百年清愛藩　第八　二冊

宣統三年辛亥五月刊成

畫い張鯀菴の筆に成る花卉を作くまる揮毫南田以後此人を推する筆法彩色を施す筆々活潑

清朝一代の傑作と見るべきもの也

特刻真に愛玩に值す

北方三十年前日本に渡來の色今圖

坊間に得ること難し　奥田抱生愛玩を匿を作る、價五十日也

一 和名類聚抄地名索引 寛永年 一冊
明治廿一年内務省地理局の編纂
に係る、諸書を引き梅井氏和
名抄郡名異同攷を撰まんとし先
つ地名を撰せしものとあり、書引を
以て検索に便す、地理考と
同法の書なれども今略る稿也

一 楠氏考 一冊
明治十六年川田甕江の著す所也
楠の姓を楠の一字とするの誤れる

十二行

を考証し楠木なるべきことを説き
の文書より引き二十証を挙く、大日
本史巻百の名著なれども尚此誤
あるを説くに甕江史料となりし
頃の著なれば考証頗る簡略なれ
和文を以て書すれども今の清新
き書也

○楠氏考の巻尾に甕江史料を得ることの
難易をいひて左の記あり
所に家に史籍を蔵かんし頃は、得かたきを以て
ものを秘して人に示さゞる習ひなりしなり、

彼の作々宗像か、都てなり大和紀伊河内等
紅葉週ても、分郷の日記、社寺の古文書を、採収
せられし、容易こうるぬるとなり、[illegible]

其後のさま、思ひやるべし、今は其人となり
かなり、一面に行く、大海世の限りさそなれ、
我も人も、重代の秘義を宜に進奏し、史料
の数を入れなうう、上ちき名誉となるなれば前
世未見の古記実録、いやつきくれ、生まれしる
鎮西九国、又は軍国の古物を考あり

さハ、享禄本類聚三代格、正倉院文書あり、
保元の乱を去ること一ハ上ハい奥ゑ人車記あ
り、その早の勝敗ハ楠木合戦注文と異し、正
儀降条、四條隆資戦死の始末ハ愚管記、
實豊卿記、地蔵院日記と詳なり、錦小路執
権の失政ハ、平政連諫状と義七室町幕
府の職制ハ武政軌範と徴すべし、南北御合
体の後、足利義満ゆゑ、後亀山上皇
を仕奉り、ハ倉宮軍敗れて、御出洛ありし後
祈祷料の地、参らせもしたれど、例の跋扈将
軍の挙動なん、似さうしるもの吉田日次
記、看聞日記なる見ゆ、北外八今の刊本なり

十二行

流らきえ人し、実録、或部をいふ数を知らず、
もし彼と此とを参考へて補正すハ、
殷礼の松も、八今一日の色まさる所ゑ思
ほゆれ、一言おとろかしおくなり、

夷江が史料に受ける修養の片鱗ここに閃く

○あとしにことのから厠に就てもろく想ひ出るまま
をかきつく、ゆゑ年時代新潟学校のあうし時或
十の厠ハ連ゆゑ心えおなるかく学ゆゑ一枚
の色摺りの世界図を張りつけ、こんゆ雅なの二
風ゆあうにか、この枝の厠ゑハよきゆゑひつきと今ゑ
ゑを思ひ起す、旅舎の便所ゑ用ゆる履物ハ谷
履とて駄を用ゆるが常なれど、谷履ゑ新に

るこの四と言う取り
ものゝ端々音楽家こゝ
潮ひゝ時集院館
しゝるを用ひゝ
之れを用ひゝ
紙後手の
鏡をそうつめ、
子の下に
矢しを
旅館と
の厠に
見之れを

十二行

命しゝこと
厠を二
膳の便所と、田端の自
の撮を
沼の
清水
溪園、原が移れ
の厠は
勿論
向ず松田
の目を
ゝらし、

（前略）
膳のまき
山谷の八百
便所
何も
道すく
氣と食つた、新
厠に
手洗所の架上に
心地
膳の三
根山の別業
豊公
豊の
の料理
厠を
厠を
真鍮

然れども眼を蔽しむるものこれが呼びしものとす男女人
ハ女の便所を見ん人とも、こゝに酒会し居ることも多
かつて、便所を宜備の資と供する八北の松田が
始まりとあらん、今ハ銀世界の大なる店舗ハ皆
洋風の便所を備へ特に人を役して掃除を怠らず
三尺高路屋のごときハ其服店の便所の公衆
に便することゝ少なからず、敢て其服を嫌ふ人ハ
あるまじ、厠の為ここに入るものなかるべし、公衆の
為めの奉仕のこと尤も人寄せの一
方便、先ず松田に倣ふべき歟
行んといふも洋風の厠ハ心地よく用便の後あび
流すがよし、日本銀行の設所に比時招かれて遠

来一切を見る時、厠をも見たが、小便所まで水を流す
工風が行き届いたものだ、日本人ハ無性だから用便の後
水桶を備へて置くことを忘れ勿ることを也、と
いふ訳から、便器に向ひあとに水の壓力で水が出
るやうな工風さへしたら、コンナ工風を八ツ珍らしく
ないが、日本の如き地方にハ最初ものを
う、日本内地ひとを不拘、農民の家庭を用ひて
みるから臭氣ハ面白けれ雅いが、強民地に於ては
厠だけを貧乏家ひとるが、頭民地から
内地、帰りに成るが言へるまへ内地に戻り高
分困るのき便所の臭氣に堪へぬことく、左もあ
れ、志かし日本ハ支那と比べまゝ優しい北京

七月廿八日市中公設便所が設けられ往日のごとく無流し
を許さるゝ様に成り（四月廿日同便所のことも唯此間かあ
り文化実に不完全のものである。若しも其人に貴人小
銀じ作日の比裸体婦人の立像を厠と立てき其の陰
部に面て放尿したことが本紙に書かれたるコニナ
馬鹿氣た工風をやつたとこうまあるまい（二
月廿三日記）

方七行西也

○松崎實の「切支丹殉教記」を讀んで同じく同じ人の考へ「切支丹殉教者」が改造社から出版されたが、北書は殉教者の傳記をもとにしてあるから遠く遠く後の作と思はれる。幸に出版されたのを見て、北書の文和も出版された。後で今は絶滅の者となつてゐる。西教史の出版されてから十年の比から、どの時も今も復刻されて出た。本も六版まで出た。北書の原本とも見るべきものは、佛人レオン、パジエスの日本基督教史にあつて、同じ國の出身宣教師

井リヨシが的流十七年頃の撰しなるものの数本
加古義一が考記にいうを版すること此のみ一版
である、北のみ井リヨシを南年八十餘歳で没
三年と日本に来る人びとある、その来る頃、一方年の
間に洋籍を典つくる、其方年を大隈侯び
あつたという、之原敬も北人から数を分けつ人の一人
で、北老人いうを原を呼び豪りたという、北の鮮
血書の版数ごとに改訂された版を別も改む
る所が多いという、松崎いう版を底本とし
典本とするバチエスの日本書籍数史と巻照した
とある、北の原版は八百八十四頁の大書で別用する
南時の報をもやら和簡まも収めるという、北

十二行

うれ北方うを完和の井六絢版書のうが識れしん
ある深は別して日本井六聖絢版記の巻があるか
らで、鮮血書の初頃はその書と擬つとと
ある、北方をいろくの挿画があるうえは初版からの
を復刻した上を今度新しくかへた義千の宮
版もある、島原の漢の版の国のことも丈一
である、初版をを中江樵湖の序が二首巻頭
に載るものひ北方をもうんを収めるある、北方
のもとの標題を日本聖人鮮血書とあつた
（三月十四日記）

反故ハ多く屏籠に蒐られ還魂紙料となる果敢ない
運命のようであるけれども、尾張の中島珠玉を芳
又する事ことがある、反故の中にも一概に棄
つべきでなく、名家の反故を逸すると兎角すると面白い
ようなブツつかる、別して縁故ある故人の反故ハ興味を感
ずることが多い、北原某書庫で中井敬所の雑録一
冊を得た、いろくの事ども張り込んであつて、雑然
云いい反故のやうなようでありながら敬所翁ハ文りが
あるから、此の雑録なる反故の對して少から興を覚

八、

此雑纂ハ二百七十枚半紙を綴つたもので敬所翁の見
聞が例の美ごとく富かんとある、多くハ金石に関する
考証などであつて、各所から寄せた印影や、金石の拓
本なども貼りつけてあるが、中に大磯の人物紀行
もあつて、同行した狩野氏の筆の紀に係る、高麗山
鷗三浦迄の風景図も添つてある、其の風景の中
に翁外二人の人物もあつて、その人物の一々其名が注
されてある、中根香亭氏なども寄せた詩が詩笺の
まゝ貼りこまれてある人物を別にして其の名を得
た手紙なども数紙収めてある中に郷純造、杉
聴雨の書翰もある、他から鑑定を頼まれた印譜
今泉雄作氏蒐

に注を施したる草稿らしいものも多く貼りつけてあるが、細心に印の鈕まで模したるものもあり、自分が翁の晩年に箱書を頼んだことのある、注啓蟄の秋室印刻とのふ印譜五冊を見たことがある郡分を鄭寧に模し、各冊の印の数を録し、箱の蓋裏に数行の題識をしたいて貰ひたつた其の題識の中に知へてあるも、所収者である私の姓名も書いたものもあるので少からず興を感じたと同時に、翁の細心が印書を忽諸に附さうに細心に十分も、敬服した。

尚清水の雑紙なる反故を翻して見ておもしろく感じたものが二つある。その一つは寛政十二年江戸出版した一枚摺の狂歌便覧とでもいふべきもの

が収めてある。それをよく見ると、欄外二ヶ所に翁自筆の注があつて、翁の印が捺してある。注意して見ると、多く狂歌を列してある中に「永」の題で詠した武人窓面成の狂歌、翁の印が捺してあることが、欄外の注で知れた。其注に曰く、武人窓面成通称森江徳右エ門、蓮乗江戸人と雅号、他の[illegible]歌、尚左衛門俊満等の狂歌以文化十四年六月刊行年四十八とある。其の狂歌の

三田川とつる紅葉のもやう柄
氷も春の志ひくをやする

右のごとくで、図録の北の摺り物で翁の先代に和南の狂歌の名人のあることを知つて、翁の名が蓮之び

其の祖父の名七兼の(文)かあることを思ふ(日氣がつくと、なんとなく)ものあることを思ふ(一脈の通ずる)しもてある、

今日一つ興味を感せしめたのは、岩田正義(世之亡日門(七))と云ふ人より弱き字を比書翰の封筒を拔て見ると、中から有料の包紙が出て白きに

表

有價
金千疋
中井敬所

裏

(金千疋こゝ目録在
中井田紙第一葉
岐生先矣直此北
鄭購説文一部力
他念　寒山老納)

北の包の澤が手紙に書かれてゐる、岩田が何かの澤び(物)を贈られ辭退せられ(中)て帰路山田寒山(卯)を久々にも訪問すると、寒山不相変素貧洗ふがごとく

十二行

で、話次彼れの手ずから近日説文會の催しを見かけ出席したいが、それこのき文求堂に新渡本の説文のあるのを購はんと思へど、蔵中無一物なり、頗くは古代金三四十錢拜借願(れ)と云ふのに、なら好ん此包を出して與へ、辭し去る時の面白き話、折角の書(包)紙は持帰れと、中を拔て見れば、千疋(五円)入りあるを、始めの二円五十錢と思ひの外、二千疋(五円)入りあるを、始めの七氣かつえて、と知ぶ(嬉)し、寒山が先生先に りとある所以び、角い二千疋(第第に)と書くべきを誤つたのである、北の行(章)は(異)山の面目を躍如たらしめるが(あつ)噴飯(物)と一笑を禁じ得ず、僅かこの手紙一枚故の中にも如何なるものが這入つてゐる

又故いろ〳〵油断のならぬことあり、私は北の友故を
忘れがたく思いて翁に就もいろ〳〵のことを思ひ起すの
みなる、翁こゝに初めてあうたのは、翁が既に七十の坂を越
へてあつやうな思ふに、タシカ亡友横井時久氏の紹介
で翁を訪ねた、早稲田大学の校印の刻を頼んだ、
其時翁は義子新家孝正氏の坐敷に自分を引見さ
れた、いろ〳〵文庫の印を捺したものを出して示された、
金澤文庫の印はかり六七種も自からテ寧に捺し
て置かれた、それは火前火後の区別のあることも
よく説き聞されたが模写が精の極に達してゐるので
一歌を発せさるを得無つた、北の印の刻が成ると、
自から捺めへて私の宅を訪ひたのは葉月であつた、自

分の其時態々御出を煩わし恐縮すると挨拶をすると
翁は云はるゝには、雅印と違つて校印は大切のものである
から、萬一間違があつてはと思ひ自ら持参したと云はれた
の也其道理あるに服した、翁の話のこゝろ〳〵度セ銀の
ことき白髪を載せた仙骨ある人であつた、坐談
が上手で多方面の趣味家で書画に
常の記憶力を有し、殊に印の刻者を問ふあれば
立ち所に明答を與へられた、私は屢〻訪問して二顆の印を頼
んだが、翁の絶刻である、翁は老齢であ
つたが、刀痕を見る毫の如何なるかを知ることを
が立つてゐる、我が家祖の印を捺くして言葉
の作かを確めんと訪ふた時は病床に居られた

まんびと病株に近いて卯を徴宣さんとしたが、えんが不起の病
で何もうまく易簀さんとし、あとで考へると面倉に時ハ
餘程の大患であつたのであらう。爾ハ平生元氣旺盛
此大患の蓐上のあつても平生嗜好のヤツコ豆腐
を食さんとし門人から少々へとハ秩父の冷の
もの妄があつたやうもある。
不忍池の心の寺を今作られ
き爾に就て思ひあるの一事が説文会が開かんとし
珍花の図書を持出して陳列したが第の陳列品の中
に爾の珍重さんとし、狩谷棭齋の自寫本古京
遺文が出て来たが、此の寫本の中に頼山陽が棭齋の
家に寄宿した際助筆した愛があるを安へて和とから

よくく繰つて見ると成る程山陽の寫した所が三葉
あつた。それから他の陳列を巡覽して大槻文彦
氏の陳列を見ると、こゝも同じ形の古京遺文の寫本が
あつて正しく棭齋の手寫である。不思議な思ひして口書を
見ると、半分切れもあるの所、試みに爾のものを合ハして見る。
と書ピッタリ合うので、自分ハ驚ろき且つまた
で、坐ろ在つた爾と向ひあるとの古京遺文の半分
ハどこにあるか御存知かと少くと知らないと云ハる
から、自分の面方の陳列の棚から持来つて爾の目前に口
書を合ハせて見せたときはハ爾も驚きし、大槻君のハ
懇意であるうとうと、ツイ今まで一半のそこのあること
を知らうとしたと云ハる。大槻氏も同様で、果てハ

五ヒに五人に譲る譲るの争が生じ、自分は其時既に北の二ツを合ハして以下氷人ハ私であるから、争の決するまで私が双方の本を預ることゝなる。概氏ハ年長ひあるとのゝ、最後に行くと云ふことゝ思つたら、ナンデモ早く死んだ方があ濟ることゝするう外ハないと暗に自分が長く生存することゝ云ハんとが、翁の反故を見るつけいろ〳〵思ひ起す。千あまりが枚数の制限があるからこんび筆をおく。

（二月廿五日記）

（十二行）

○又止蹟の書二三を録す

二月廿五日記

一懲毖比録　四冊　写本　二冊

北方寅政甲寅年の比作の木深迪　朝鮮和錦に於て四方を以て解かるゝ巻

信に記したるが、寅和三年十月深川の

の見物　類稿あり、前年　私淑懲

毖比録と流宮録と別しなることあり

也海ちなるや否や　流宮録の方

ハ甚比稚れども　長崎に居り器用する

由なり

一冷泉為泰筆小公主　十二ヶ月　一巻

北條氏物語原本の模演原本なり

紫中ヨリ、為泰廿二年のとき狩屋
時川院の雷を感じ年中行事のさま
をもて古体と書きなすことを原
ひこの為泰の自筆に記しあるといふ
北殿的流四十五年二月成る、巻尾と
吉田定義の後跋ありて又分子十二行目
の解説あり

一　志都呂の宮　八田知紀歌集　春

巻首に神歌の短冊二枚を掲げ、言
時西風の流商なり、これと俗人的流八
年二月十日知紀の追悼歌なり墨

十二行

堤大七郎と聞きし折霞沙と題し
同日の重題夏茶屋を神祇あり
西風と婦いりなりと云ふ知紀は西風の
ひのまに北巻載せる和歌中西風と
題つくる和歌多し貫名氏、任下し
命に神祇を賜りなるは異数とい
へし的流三十六年知紀の三十年祭巻
りし第出版田田に頒ちなるを
和歌の友人の手なるを集めなるこの
とくに本集に収おるものの多
からんか

一 義山紀子詩　十二冊

長州葉菊裳(昭)の撰ぶ所、元結廿三年出版、支那の義士を歴四る数十件を収む、各件に一詩を附し繫く流名に文部に図の図を本部に拉せ、新しきものを撰まば果して北の三分(一を省)し得べきか、愛東子

一 兎鴻堂印譜　複製本　五帙二十冊

四人、岡田川政文、北印譜を複製して定民を数年を費す、家義の印譜原本三帙九袋にて其の原本に元そ一を北

の複製は上海のそれを遥かに精なれども其價二万五千円といふに時勢なれば久しく猶ふことを為さりしが家翁本首尾二帙、潮州の為めそれを補へんと欲し、初め二帙を購ふて後亦三帙を購ひ、原本と殆んど遜色なく、其の印譜の全部を収むるを翻刻せんとの意を抱き、「小物雕鐫」なる冊を埋もれ印譜数を作り一々朱肉を以て拓したるものを印刷せしものなり

○島津久光が岩倉右府ニ大隈侯を送ることハ蓋右府の手紙ニ後藤氏も其旨を知る大隈と同意を久光又大隈ニ說ひしとあり取り入れし事実なるか其ハ久光の談記を編あるか世ニ行はる文書の無いのハ困つてゐる拙稿の如き文書があるハハ日向ニ在る海老原氏ハ久光の後ニ所有すると料中ニも左の如き文書があるハハ日向ニ在る海老原氏ハ久光の後ニ所有すると大隈侯の談話し得ず一書を裁して三條公ニ請求せしと云ふ所あり○此一書の内ニ皮肉があつて蓋し公の無駄を吐へてゐる概がある此件ニ関して真ニ好資料である

二月廿六日記

十二行

重信前日一書ヲ捧ケ衷情ヲ懇訴ス閣下諭示スルニ島津左大臣公ノ建議中重信カ行事ニ渉ルニ非ス公唯重信カ職ヲ免センヲ内談セリト重信命ヲ得テ驚疑ス疑テ質スンハ大臣ニ接スル道ニ非ス請更ニ之ヲ言ハン夫閣下公ト同シク中興ノ元老職渙内ノ具瞻ニ在リ其言行人心ノ向背之レニ係リ治亂ノ機之レニ乘ス重信不肖ト雖モ員ニ内閣ニ備ハル亦衆ノ屬望スル所タリ而シテ公苟焉トシテ重信カ免職ニ内談スル所以ノモノハ其職ニ稱ハサルヲ以テカ將タ過

誤失錯ノ糾正スヘキアルカ閣下和シテ之ヲ然リトス抑高意ノ公ト著スルカ然ルニ免職ハ參議ニ止ルニタヽト其過誤失錯ハ果シテ該職ニアルカ是重信カ疑ノ解セサル所ナリ願クハ閣下襟懷ヲ披テ明示シ以テ重信ヲシテ安スル所アラシメヨ然ラサレハ重信

皇帝陛下ノ明ヲ汚シ且ツ閣下ノ知ニ負ク恐懼ノ至ニ勝エス謹白

明治七年六月

大隈重信

三條太政大臣

岩倉右大臣殿

閣下

私儀

昨夏以來肝臟充血之症ニ而種々療養差加略又快復ニ候之處當入ヲニ至再發一層惱苦相增人事難辨程之義ニ付篤ト治療仕度候間恐縮之至ニ候得共當職并兼官共被免度此段奉願候以上

明治七年六月

參議大隈重信

太政大臣三條實美殿

○茶儀の稽古を初めてみるから、侘味の茶にかんじみるこの人体ひとつの、某名家茶人が白紙の幅を床にうけたるも侘味を尊ぶもの、何も書いてないから却て無限の意味がある、侘の奥儀もつまり無の一字にあるのみ　京都の大徳寺の杉江の茶を招ぎ不昧が晩年隠栖した関係から、其の小目録が納めてある、これも白紙の掛物に似たものであるが、侘の十畳の間の四方一面円形を描きの空白のようなものがある、これは侘の奥儀をあらはしたものであるが不昧の発明であるかといへば、不昧公も茶界のぬし家であるから、何のうち雪舟の業に成る円窓を手ずから入れ、その円窓の中に自から宗納の二字を署し、それを自像と元と比所が不昧の超凡の意匠で侘三昧に耽つた人の絵像は何ぐらあら拙くあるとも思ひきや人もそも北の幅を見ると不昧らしも遠こそ前代の雪舟が後代の人の像を画くこそいとと思ふも無拙いうのが、不昧が雪舟の筆を利用した所に茶人風が有する、北幅は横物で飾り大きなものであるが、不昧は大茶人としも侘んもつてみるが、北人が大なる侘者であることは却て北人が知らず、侘侯の内に北人をも侘に深く入つてある、

○不昧が将人廓して仕舞三とは いろいろの工人の内に如流と

侯が名を命じ此木工がちうたい、こんが弱る名工で不昧ハ
常に化蕃の注意に此人を待つて式る時江戸の
千代田城に大名集会の席上いろ〳〵風雅の話
の出た折、不昧ハ例のこゝろゝ此木工のうを待ち出で、
神妙不思議の技能のあることを云ひ出したのひし
薩摩の島津侯が此人ハ其音使を不昧に乞ハし、瓢箪を持セて
といふて招音使を不昧に乞ハし、瓢箪を持セて
どうか此の中に一面に紙を張らせて貰ひたいと
入れ、不昧を此難題に掘して閉口し、敢て如
泥を乞し、島津の依頼を待ちて如泥を其ものゝ後
流しを直に問えゝ恰へり問もなく出来ましたといふて瓢箪を差出したが内部と果し

十二行

て紙が張ってあるかどうか外部からも知るようもなければ
疑ひの面もちもあつたのを見て取り如泥ハ即坐に
瓢を破つて御覧なさいと云ふのを見れハ成る程
一面に紙が張つてあるので満足ハしたこゝろ、弱り
品を破つたのうを不昧も色を失ふて如泥のいふ
ままに島津家の瓢を大切のものであるから慎つ
たのを試みに張つて見たのであるから御心配な及
ばめとあつて初めて不昧もあゝしたといふ如泥
の工風を聞いて恰る程先づ島津家の瓢と似
寄りのものを多く集め、松江藩の名物紙工論
を出すなど、紙の名物のぐさやくを言ひこのもち
みし瓢の内く流し込み、えを抜し其口を武田か

試み遂に成功したりとぞ。その工風が大略にして、北谷氏の心
づけいろいろの物が相重なりて、其内に鋼管
多数を使用あり、こんなる精巧の曲げものにて、木
のつき合いは七面が何れもそのまゝとなる。
また二本の木の間を結人にてこのあがついたるとぞ。外に誰も
知見のなきものなれば、此者を知らずして長くこの工業を
彼の二階の工業の床の間の横に箱めこんである。
スカレヤリの校にあるこれを不昧の江戸の別荘のあるとぞ。
どうして因縁ありしか。北如泥は
いろいろ秘密の工風をしたるの機械を作つ
ひが、その機械の如きかくまを機械一切

を秘密にしたりとぞ。細工場を家人七五人ばかりこと
が出来ることいとぞ。其の技術は信じがたきまで
んの作品をもって尋常の厚さの刃や鑿などは別産不
り難い秘密の細工スカレを作ることがあるとぞ。
彼れは斯る細微の技巧をおそるべき大酒家
で酒を泥酔人事を弁ずることあり、ある時市
上に出人に無礼を加えたことがあり、不昧は戒めの為の
如泥の名を授けたりとぞ。後まで四肢麻痺と
なりたりとぞ。

不昧の封地松江藩は十八万六千石、不昧が家を
受ける前後まで鉄鑛の業が傾いた。大国の為の
流れ、十七万四千石の減収を見たことがある。

北時義方から三番面倒を見て貰い、江戸家老が
万方金二朱しか出来ないうちに、一番七歳（年齢）出来
事務をとり、四千石位を家老が三四人あり、他不時の
父の家に伏見家から来ておる者家に仕えて
七七郎が三歳の時、内政の処置甚だしく不時ハ
十七四年まで封を受けたが荒かい時貧困
を救う事辛酸を嘗めて、のーく内政が
回復すると比叡山の修復を幕府から命じら
れてこれもかなり難儀をし、保しの不時を
聰明の人で大いなる利殖を図り、
耕地の廣い、ヒヤワの郡を多くの松と強えて

こんな風に荒地を開墾して
く考えあった、茂岸工事を施し、その他
農利の増殖に鋭意を為の後ろ盾
十四万石を算出する事になった
をし比叡山の川端に八ゼを多く植えて
採る、朱馬の二百毒を奨励し、和紙の
業や、絹織の採繭、人参の栽培、漆器
の物産をとる力を入れた結果、後年の事
総額で多くの利益、不時を荒年から救った三時
と身を安の中間時に武義を重ぶ
あった、茶ハ孫三時から練達を経ることも
言ふまでもない、役人から面倒を善時代を善善

買い集める力も無のに、後ろを天下の名茶ハ
皆奇北人に悔しに、それが為め数することが
晩年に成て多く、後ろを為角の富豪から
傳受まもなしに、古的大手毎年の時に成て
北けれども不味を怠らず成を修め武を練
つに、それが為め異志あるあらやと茶
府ところまん北こともあつに、
不味の室ハ仙蓋侯から嫁かれに人に文義に長
し珍らしい女傑にあつに、ある時不味がめしに、うの七錦襴の
か北人に、ある時不味がめしに、うの七錦襴の
刻衣地を志きりの国賞玩し居るのを見に、を
人る刻衣が沸入れもあるが差上ずまるいのを出

しを来に北の帯用の帯にあつにのに、不味も動き
仙蓋ハ流石に高人様と云いに、北夫人も茶に
通しも天晴時に茶をとるとるとるとるとることもあつに、夫
人が茶をとるに時に茶碗の縁を唇の紅痕が
附着し、それを不味が茶巾に拭くと拭かく
るつに北のに、それから紅塗の茶巾を拵つに北のに
夫人も茶の時に注意に成に頃に紅を塗
しなくるつに北ども、つい流も残りもある、不味に
二人の蓋蓋があつに、「うに北ぎ」と「おかずに」とあつに、
蓋蓋の帯にも往々傲慢の振舞があつに、を
れを不味が不問に附せず巧みに風にも巣を挫
いに北ども、いよ淡も杉江蓋に、いろく残つにを

なる時仙蔵屋敷にて自在かぎを少うしくんと不
味が頼まれたに、石味ハ味ハ流して其の寸法を少き
のやうに、先方の答えるいまゝ墓宮の指図と
元りか丸ものから寸尺ハ自在かぎに準ず
此るから御隠居こ乾ひたいといふて是さそれの
ど不味も丈夫設る脇したといふ話も有る、若若
こ新しい工作つた美海か其の屋敷に残る
ものから割引して伺を望め居たるまゝ、
日出雲出身の剣家内義伸しが三時頃
海つて語つた話の内の坊上のことき事実が
記臆こ有ることもあるやうな者ときつける
る一二書き加めべきことがある、墓府の隠居が

松江へ入る時隠居の侍（半助）ハ身をやつし
て江戸料理とふを創めて地酒屋へ入りびたり
る毎日の如く茶屋と石食寸三五と言ふ茶屋の侍が
あつたいえの通こ隠居なることを看破し此
刺し殺さんと工風中、石味が内へ知つて直侍こ
元りこそ仕ものと江戸へ出て、墓府から一日不
味こ差紙が来たりが石味ハ時ハ其の意味を
感ずいた如く逃と言ふ代人こ出して
白洲の取調後の内へ帰る半助ハの
ものの半三五を五キロ之れを殺さんとす
屠腹して死した其の屠腹の時藩主の実を
叫び隠居の逸を弁じたので、墓府も覚る

不あるを有部無部の宮〻圓地子伴を兼り云
んとにふるとみる。
不味こいろく道具のあるに内〻角觝樂師の
技を觀ることも其一ひあるに為時雷電神(かん)
嶽龜面山ともいふ有名なる力士がみるに神(かん)嶽
八坐雲出身び雷電もに不味の抱えひあつ
に、四方の金多角觝に時を不味の縄張内に
屬するのに不味の許の土得さえば圓向後の大
相撲興行八成三一ろい住びあつたと云ふんをみる。

○

○前日の圓醸合席上今を部筑書裁に初めて圓
に、此人八香道の名つ家禾香炎の知識山やる人びあ

さ、かつて此人の席上香道の流を試みれ其所自分八
欠席したのに、此日自合ろもいろく香に就て物問
する不がありて其節ものへつれ一二のものを左の
一あり。

名香の六、四七種

古伽羅(キヤウ)
羅國
真奈香
真奈伽
伽羅
寸門多羅
新伽羅

香は皆出産の国名と云ふ事羅国をシヤム真臘ともいふ サリヤ羅ハ「スマトラ」ニテ、マナバンの香は沈香 サンリヤ檀ともいふ、時南洋航海の国名なり

ハラ伽羅とも加羅ともいふ 地名なり

公家殿様御所の菊蘭奢侍も古伽羅ニテ奢侍ともいふ、ニテもあり、一木四名

鉢ヶ谷の香木にて一木四名

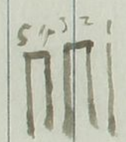
と云ふなり、伽羅の方がよい、ニテも一木四ヶ所ニ名を異にするなり

紫舟　仙蓬莱
白菊　細川茶
初音　加賀茶

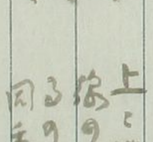
十二行

薬種

香の業を源氏五十四帖にはめたのをいつの頃よりか始へて用ひ利代九とも、香の業の種類後世の組合八五十二を出ることが出来ぬ、数理上組合せ出来ること能はざるなり、二ツ物が足らぬ、ニツ物ハ五十四帖首尾の二帖ハ香の業に配当されてゐぬ故に強ひハメタ事の日もあるが、ニテも面しく無いと云つて、



これが写本別々の香の形



上に桜の花の図香の形

昂二三
上巻
八月桜
三月

江戸へ行われた香の流派は大体志の流派であるといい
御茶道家流派である、三條西家が御家
流の祖であるといい、
香枕というは長方角で上部丈がシヤクレて
おる、引出しは香炉を入れ、側面は香の紋形
のスカシがあって香篆をたもつ為にこれを
枕というが実は歌を載せるものであって、枕の
前に置き婦人が髪を載せて薫香を移
すものであることも初めて知り得た、
聞香も一種の勝負ごとである競馬のやり方の
如き双方ごとく似てある志賀流石に品格
を保つことがやかましく、勝ごとを禁ず

十二行

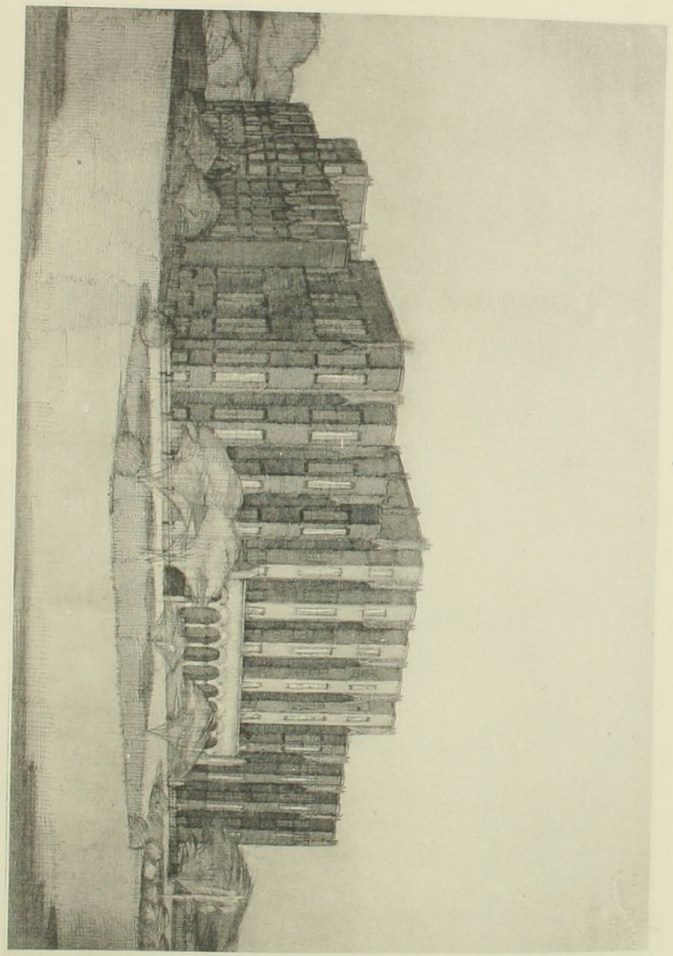
しているが、勝つ方へ紅縁の奉書に勝を
録して表章にすることが例であるという、
銀葉や香箱をもって包むタトウの内面は朱
の皮のことき色をなしたるが用てある、あんへ何色うと
の尋ねも見るが、朱の皮は硬くして用ひ難
きもあれへ鹿もろしの皮との答を得た、
香札は四の字があるのを何ごとを賭したらあ
んへ答の字の者服があるとのこと、香の組人を
の時答香は同じものを三ツを出す、唯だ答と
言うあるは四一種を出すが法があるも
越中の節の内に香道の大阪を初め江戸迄人口唄
があるという

歴代天皇のめし給ふ水尾帝が殊に香の道を
好給ひあつたといふ
昔しから高貴の人の嗜具に必ず香器一切を
備へたものだ、今でも皇室の内親王の降嫁の
時度々香器をかくし、其の調度の
部品も無つたといふのみなら
香の器を模倣化していろ〳〵のものに用ゐること
まつたのも多く種彦が田舎源氏の物語
んを巧みに用て氣味を発揮した、それから之
めこ倣つたものであらう。（追記）
茶儀と香道の密接の関係ることは申すまでも
なく、先づ宮廷りつきの手ぶりに香を薫する

十二行

実に天の時に手をこめる器す、二ぢり戸を入るとそこに香を焚いた香炉が置かれてあるそれを先道の客が、丁寧に香炉を持ちて床の上に置き一同席に入ると、其香炉を真中に坐こおちまわり輪次に嗅ぐことは始めて実へた、

○本年大紀念日南のそらを利用して新築式を行ひ午後より復興ちんもくする国旗の光景を展観に供するの栄誉を得て往き観る、会場へ大講堂の西川に立面する最高の建物なり、北大講堂の雪景の時僅に しンクリートを形成し居るまでなりしが其後表成を生ずるに初めて也、七千人の坐席あるも講堂が二階も席もく、カラクリーに時に席もくるる坐席ひろく平面に坐することゝなる、華美の装飾ハなるし但仮設寶を旨とするが如し、紀念場の周囲を円形にするも廊下なく、そんに程々の国旗陳列しあるのみなれど特に記するものあるを見

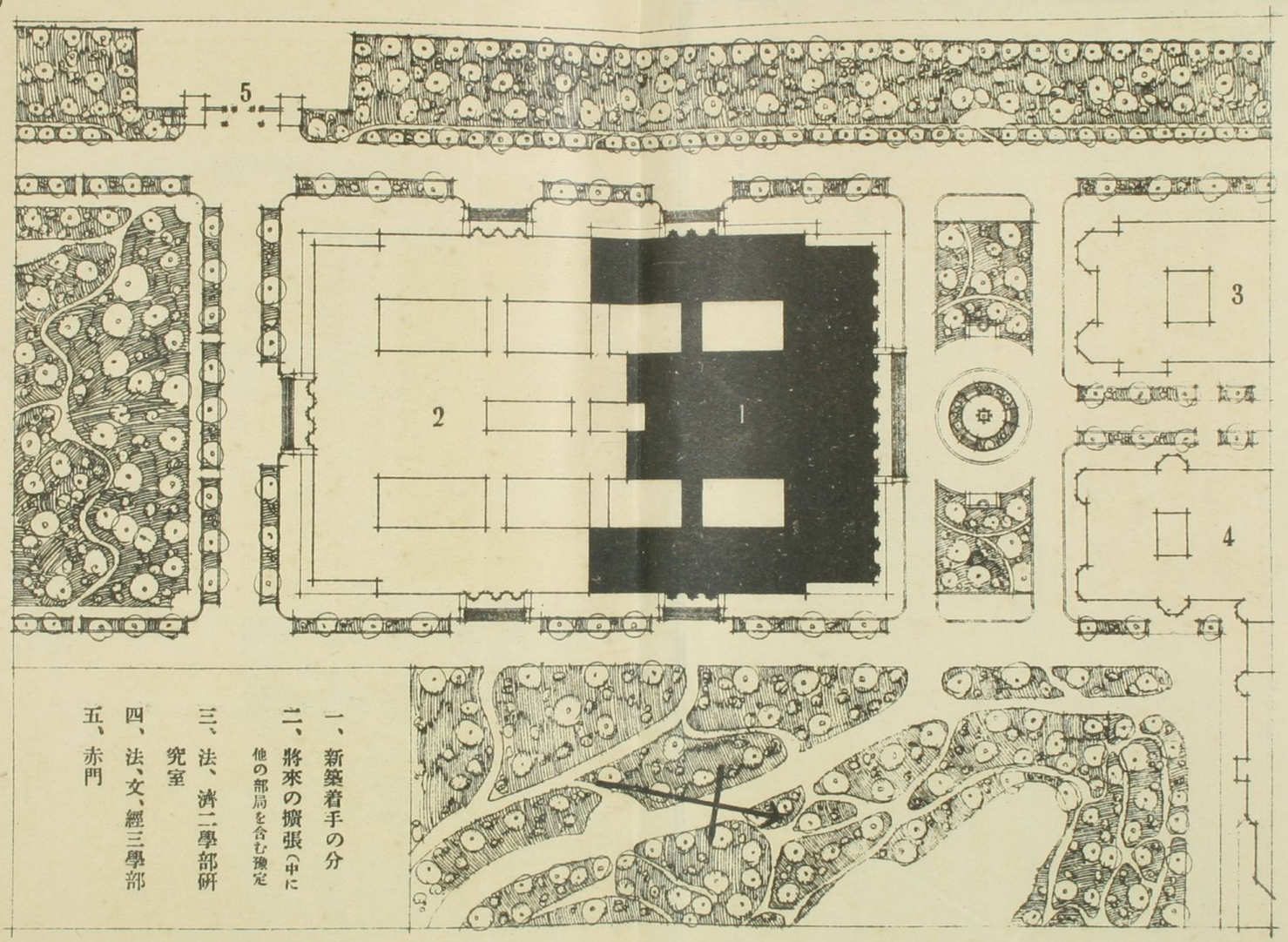


新築図書館遠望

本館南端の邊より北東北方即ち元の法文見

(一)

圖書館並ニ周圍豫定圖（實大千二百分一）



一、新築着手の分

二、將來の擴張（中に他の部局を含む豫定

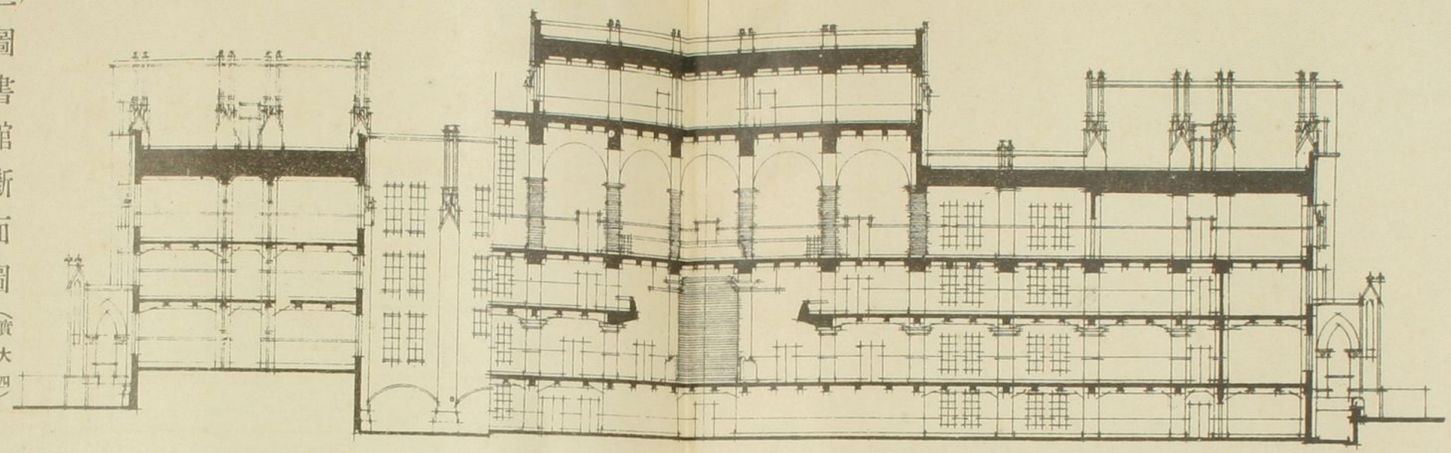
三、法、濟二學部研究室

四、法、文、經三學部

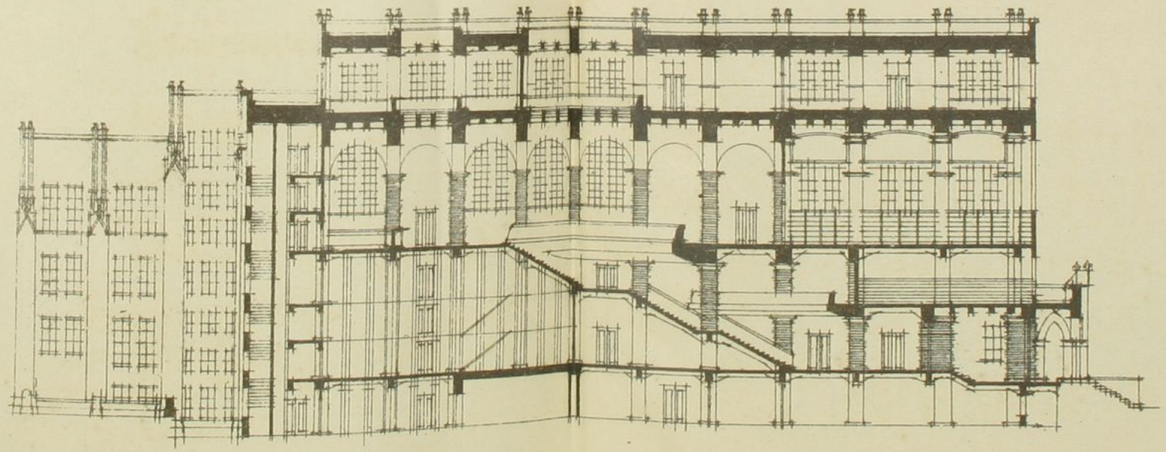
五、赤門

3
4

(二) 圖書館斷面圖 (實大百分一四)



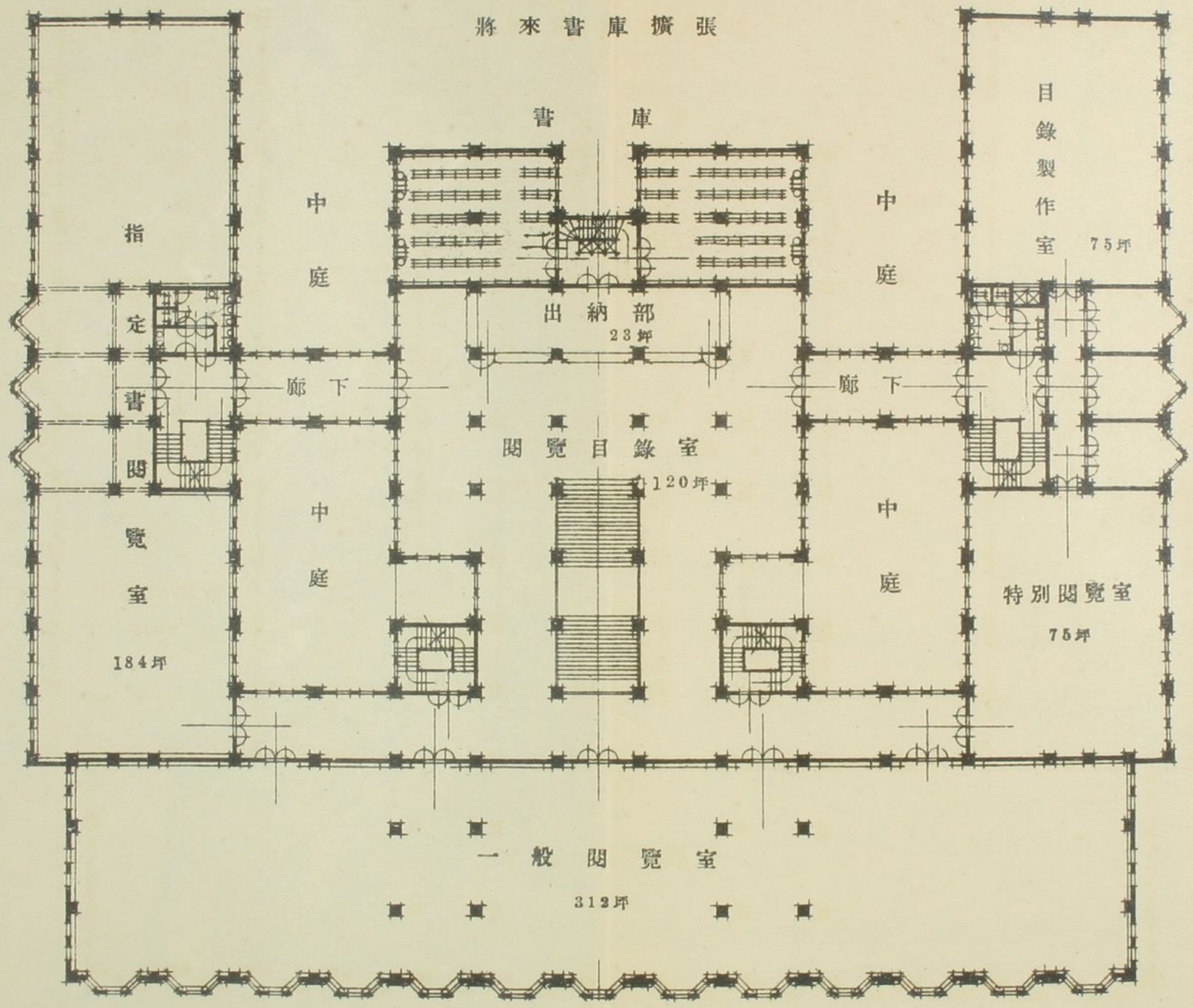
A 東西に通しての中央斷面（即ち北より見て）



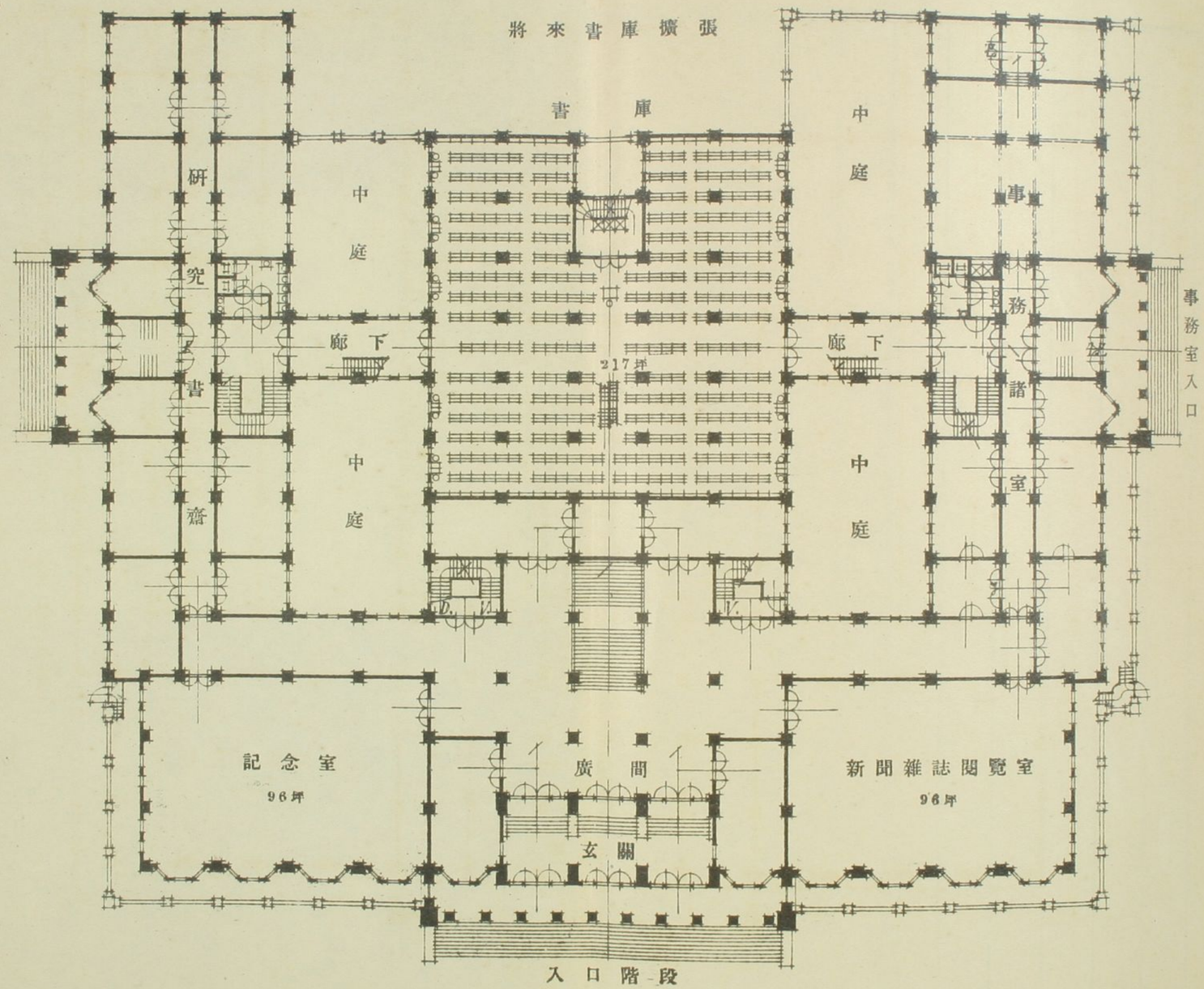
B 南北に通しての中央斷面（即ち東より見て）

(三)

圖書館主要(第三)階(縮尺百分一四)



(四) 圖書館地平(第一)階 (實大百分一四)



受けさせし、但し後記とする国書級の就ては
聊か少くかまを記しつゝあれど、別国異事に
て特しなるを以て之を先の條件に
て博覧の強記といふ、すべく実大なる建物なり、此
後無いと雖も大なるが為めの幸を得るは、ロシヤ
エラーが遠藤費として四百万円を空費したること
を以て、其の国の全部出来る迄なり、妹
あり実に面倒なる條件なるが為
め有合沿革を設することが出来るのである、但し
書庫丈は或は他の事件を添加して増加
さるべきは狭隘なるを以て政府の支出
を仰くとも政府は一時に出金せざるべからず若
しロシヤエラーの実の附属品なる復興は
五年間なるべしとの説あり、或説に日本政府
はロシヤエラーに出資を勧誘したるが如
もあんどさることは実に全く自費の実附
するといふ外国人の再建する国立級の
焼失は絶対に聖者を切に神徳を利益
することを願ふ と異なること又亦一
大学芸集の国書も既に五十三番冊に達す、等
附国書の冊数の大なるは徳川氏南葵文庫の
国書なる十一番を数ふ

十二行

十二行

東京帝國大學圖書館復興報告第三

第一回は大正十三年十月末日現在圖書の狀態について。
第二回は大正十四年一月ロックフェラー氏寄附金について。
今後「圖書館復興報告」として隨時公表。

一、新築設計及工事

昨十四年一月報告によりて發表したる通り、ニューヨークなるジョン・デ・ロックフェラー氏は、本學圖書館復興資金として金四百万圓の寄贈を申込まれ、本學は評議會の決議を經て之を受納するに決し、其々の手續を了し、同氏の申込に應じて三人よりなる管理委員會を組織すると共に、學内に建築委員會を組織したり。建築委員會は總長之が會長として、方針を議し、資金の大部分を建築及設備に費し、豫備金を以て他日の圖書購入費に宛つる事を決定したり。此方針に應じて圖書館建築部を組織し、建築部長の任は内田教授之に當り、建築設計に着手して、事業を進め、設計決定以前には敷地整理の大體を終了せり。その間五月より七月にかけて、姉崎圖書館長は、海外に旅行して、完成十年以内の大學圖書館を巡視し、專門家の意見を求め、その結果を齎らして更に建築部長と協議を進め、建築委員會の決議を經て、建築設計を確定したるは昨年十二月十五日なり。其結果、建築部は、競爭入

札によりて、大林組と契約を結び、請負人は正月より直に工事に着手したり。此の如くにして敷地割其他確定の後、一月廿八日地鎮祭を擧行し、爾來、着々歩を進めつゝあり。

右建築設計の根本方針は、先づ寄附資金を以て、閲覧室、事務室、研究室、書庫の主要部、安全庫等を建築し、書庫の擴張その他建物の延長によりて增築し得る分を他日の擴張工事に委するにあり。此方針に基きて確定したる建築設計によれば、建物大體は三階乃至四階にして、書庫は七階を數へ、圖書館としての主要部は第三階にあり。此の主要階は中央入口より約二十四尺の階梯を上りて中央には閲覧目錄及貸出部(一四三坪)あり、それより一般閲覧室(三一二坪)、指定書閲覧室(一八四坪)、特別閲覧室(七五坪)に通じ、その外に事務目錄部(九八坪)あり。地平階(第一階)、は中央入口の廣間を中心として、左右に記念室(九六坪)、新聞雜誌閲覧室(九六坪)あり、左翼は研究書齋(一二八坪)、右翼には事務室及附屬室(一三九坪)を連ぬ。地平階の下は地中階にして、貯藏室(三三五坪)、荷解室(五六坪)、消毒室(二三坪)、製本室(三〇坪)、機械室(六八坪)等あり。地平階と主要階の中間階(第二階)は左右の階梯によりて達し、特別陳列室(八三坪)を中央とし、左翼には研究書齋(一三五坪)、右翼には研究書齋(五三坪)及事務室(九八坪)あり。屋上階には演習室(七十坪)及喫烟喫茶室等(二一〇坪)あり、書庫は全體に通じて九〇五坪の外、安全庫(七五坪七五〇立方メートル)には特別裝置を施して特別

貴重書の貯藏に宛つ。此の如く全體に於て、廓下等を除きて約三三〇〇坪の室内利用面積を算し、書庫は五十万冊を容れ得る外に、諸閲覧室の四壁及貯藏室の容量は約三十万冊を算し得べし。但し現在圖書既に五十餘万冊に達し居るを以つて、新建築完成の時は即ち、既に書庫擴張の必要に迫らるる時なるを豫想せずんばあらず。

尙右設計は挿入圖面を參照ありたし。又全般設計の外、内部工事、諸般の設備については技師を海外に派遣して研究中なるを以つて、其結果、着々協議決定するの運に至るべく、今後二年以内には悉く設計を決定し、又は着手完了し、悉皆完成を見るは、その後一年弱の豫定なり。

二、圖書寄贈及購入の狀態

本學の圖書復興事業は、國の內外より來れる厚き同情と援助とによりて、引續き順調に進步することを得たり。曩きに、事業開始後大正十三年十月末日に至るまでの結果を、第一回報告として發表せしが、今こゝに、その後大正十四年十月末日に至る滿一ヶ年間に於ける成績を發表す。其の總結果冊數左の如し。（上段は現一年間、下段は前期との合算）

	和漢書	洋書	計	和漢書	洋書	計
寄贈	一五、〇一八	一〇〇、六六八	一一五、六八六	二一一、三〇四	一九七、六九三	四〇八、九九七
購入	四七、九九九	五〇、一九二	九八、一九一	七九、一三八	六四、四八九	一四三、六二七
合計	六三、〇一七	一五〇、八六〇	二一三、八七七	二九〇、四四二	二六二、一八二	五五二、六二四

即ち震災後約二ヶ年間に、本學が復興せる圖書の總數は、概算五十五萬冊に達す。

右のうち、各學部にて直接收藏せるものを除き、圖書館に收藏するものは、

	和漢書	洋書	計
寄贈	一八五、〇三九	一七七、四四二	三六二、四八一
購入	三九、一二二	七、五一三	四六、六三五
合計	二二四、一六一	一八四、九五五	四〇九、一一六

にして、震災にて燒失せる七三〇、〇〇〇冊の約六割に當る。

A. 國內に於ける寄贈及一般購入

右總結果に示せる數は、內外の寄贈と購入とを包括したるものなれば、その中、海外よりの寄贈は別項Bに讓り、玆に國內の寄贈と一般購入とについて、圖書館及法文經三學部分を示す。それには冊數の外に、二三の記述を加ふ。

○圖書館の分（上段は現一年間、下段は前期合算）

	和漢書	洋書	計	和漢書	洋書	計
寄贈	七、二五〇	四、七三六	一一、九八六	一六五、〇三九	一五、四四二	一八〇、四八一
購入	三〇、四六八	六、七一七	三七、一八五	三九、一二二	七、五一三	四六、六三五
合計	三七、七一八	一一、四五三	四九、一七一	二〇四、一六一	二二、九五五	二二七、一一六

購入圖書のうち特に注目すべきもの左の如し。

岡本金太郎氏より購入せる本邦往來物　一、八五七冊

渡邊澤次郎氏より購入せる靑洲文庫（外に同氏寄贈の分あり）　二一、七七〇冊

趙男爵家及德野貞吉氏より購入せる漢書　二、九三四冊

池田隆完氏より購入せる支那地誌類　九五九冊
市村文學部教授の手により支那にて購入せる漢書　九、七三一冊
上海にて購入せる覺廬叢書　一八、〇六七冊
ドイツより購入せる地理學者ライン教授の日本地理に關する藏書　五七六冊
ドイツより購入せるヒルシフエルド教授のギリシヤ、ローマに關する藏書　五、六五九冊
この外、サー、チャアレス、エリオット氏より購入せる東洋の言語、宗教、土俗に關するエリオット文庫の、東西兩洋書籍約七千冊は、特に注目すべきものなれど、未整理につき、右の中に算入せず、詳報は次回報告に讓るべし。

寄贈圖書のうち特に注目すべきもの左の如し

依田美狹古氏寄贈の國文學書　一、七七七冊
伯爵松平直亮氏寄贈の支邦哲學書　一、一三五冊
柳谷武夫氏寄贈の支邦哲、文學書(和本)　二六〇冊
三菱合資會社資料課　一、五三九冊
子爵勘解由小路氏寄贈の古書及記錄類　一八六冊

サー・チャーレス・エリオット氏寄贈の軟體動物研究手錄　三三帙
故マードック教授夫人寄贈のゼズイト傳道會書簡報告類等　四五冊
某宮家より下賜の日本關係古洋書　五一冊
藤原勝氏寄贈の醫學書　二一八冊
パリ音樂出版社ルデユク、デユラン、ジオベル等寄贈の樂譜　二〇〇冊

外に河本名譽教授の寄贈にかゝる、眼科及醫學史關係のヒルシベルヒ文庫一萬余冊、及び故森林太郎氏遺族より寄贈をうけたる歐外文庫約一萬冊あれども、共に整理未了につき右に加入せず。

右本館以外に各學部にて收藏したるもの左の如し。

○法學部（上段は現一年間　下段は前期合算）

	和漢書	洋書	計
寄贈	四、八二七	一、三三九	六、一六六
購入	五、二六六	二四、八二七	三〇、〇九三
合計	一〇、〇九三	二六、一六六	三六、二五九

	和漢書	洋書	計
寄贈	一五、六四七	一二、四二〇	二八、〇六七
購入	一五、三九三	三一、八六五	四七、二五八
合計	三一、〇四〇	四四、二八五	七五、三二五

購入圖書中特に注目すべきは

ワッハ教授の私法に間する文庫　一〇、二〇〇冊
ノイベッカー教授の私法に關する文庫　六、六〇〇冊
キルヘンハイム教授の法律學一般に關する文庫　四、五〇〇冊

○文學部（上段は現一年間　下段は前期合算）

	和漢書	洋書	計	和漢書	洋書	計
寄贈	二、一三二	一、五五三	三、六八五	五、九四九	二、六一六	八、五六五
購入	八、七七四	八、一〇一	一六、八七五	一九、三七五	一二、五一九	三一、八九四
合計	一〇、九〇六	九、六五四	二〇、五六〇	二五、三二四	一五、一三五	四〇、四五九

右のうち特に注目すべきは
阿川重郎氏より購入せる朝鮮版本　五、〇〇一冊
故上田整次氏家族より購入せるドイツ文學及劇に關する洋書　一、五九六冊
上海にて購入せる哲學に關する洋書　七三一冊
ゼ・ピ・モーガン氏寄贈の五千弗による購入英文學書（未了）　七二四冊

○經濟學部（上段は現一年間　下段は前期合算）

	和漢書	洋書	計	和漢書	洋書	計
寄贈	八〇九	四〇	八四九	四、六六九	五、二一五	九、八八四
購入	三、四九一	一〇、五四七	一四、〇三八	五、二四八	一二、三九二	一七、八四〇
合計	四、三〇〇	一〇、五八七	一四、八八七	九、九一七	一七、八〇七	二七、七二四

購入圖書のうち特に注目すべきは
ユーゴー・ストライザント教授の經濟學文庫
在ハンブルヒ老川義信氏より購入せる歐洲大戰に關するドイツ圖書

學部復興圖書合計

震災にて圖書の損害をうけたる學部は法、文、經三學部の外、醫、工の二學部及び航空研究所あるも、航空研究所は位置の關係上獨立に圖書を管理し、醫、工二學部は損害の程度比較的輕かりしにより、本期に於ける復興圖書は極めて少きに故に、これらは凡て除き、法、文、經三學部の復興圖書合計を算出して、學部の復興圖書の概況を示すに、左の如し。（上段は現一年間　下段は前期合算）

	和漢書	洋書	計	和漢書	洋書	計
寄贈	七、七六八	二、九三二	一〇、七〇〇	二六、二六五	二〇、二五一	四六、五一六
購入	一七、五三一	四三、四七五	六一、〇〇六	四〇、〇一六	五六、九七六	九六、九九二
合計	二五、二九九	四六、四〇七	七一、七〇六	六六、二八一	七七、二二七	一四三、五〇八

B. 海外に於ける圖書復興援助事業

第一回報告以後も海外諸國に於ける援助事業は依然として盛なる活動を續け、その蒐集になる圖書は、引續き續々として圖書館に送付され、圖書を入れたる木箱は、假圖書館事務室の廊下に山積さるゝに至れり。圖書館は直ちに之が整理に從事し、一日も早く利用の道を開かんと欲するも、狹少なる假書庫は既に充滿して餘地なく、止むなく新圖書館の建築終るの日を待ち、その間、苟くも本學内に圖書保管に安全なる餘地あれば、直ちに開函して内容圖書の整理に從事しつゝあり。即ち假圖書館の廊下には數百の荷箱を堆積せるも、其他にありては、大講堂二階假造の室に數万册を整理中なり。開函の順序は、成るべく、貴重書と廣く學生教師の利用すべき種類のものを選むことゝせり。

第一回報告以後に開始されたる新たなる援助事業は、スエデンに於て、外務大臣、大學總長、日端協會長を主腦として、他の諸國に設置されたると同樣の援助委員會が設立せられたること、及び英國に於いて購入寄贈の事業が開始せられしことなり。第一回報告に記したる通り、英國政府は議會の協賛を經て本學圖書復興の爲に金二萬五千ポンドの支出をなし、此を以て英國書籍を本學に寄贈する事となり、バルフォー卿を會長とし、サー・イスラエル・ゴランツ氏を書記長としたる委員會を英國學士院内に組織し、英國大使サー・チャーレス・エリオット氏を通じて、本學圖書復興委員と往復交渉を重ねたり。其結果當方に現存する圖書目次と、當方の希望する書目とを作製して、之を英國委員會へ發送を完了したるは昨年十一月末日なり。英國委員は、此に據りて重複を避けて圖書を購入すべき手筈を定めたり。且、右以前にも當方より希望を表明したる法律書の中、既に先方より送附せるもの若干あり。右委員會の事業完了の後、全體の結果を報告し得るは期年の中にあるべしと思はる。

今期に於ける海外よりの寄贈復興圖書にして既に圖書館に到着せるものは、五三一箱にして、その内容圖書の概數は、九三、〇〇〇册なり。之を前期と通算すれば、總計一、〇九九箱にしてその内容圖書の概算數は約一八二、〇〇〇册なり。

今期に海外より受領せる寄贈圖書入木箱を國別に列記すれば次の如し。

○アメリカ	ニューヨーク齋藤總領事取扱の分	六二箱	
	スミソニアン・インスチチユション取扱の分	六八箱	計 一五四箱
		二四箱	
○イギリス	英國學士院取扱の分	八〇箱	計 八一箱
	その他	一箱	
○スペイン	主としてマドリッド大學の取扱	一三箱	

十二行

ケンペル著日本史

(裏面を御覧下さい)

古雅革製本　上下合本

一千七百廿八年版　約二百年前

THE

HISTORY

OF

JAPAN:

Giving an ACCOUNT of

The antient and present State and Government of that EMPIRE;

OF

Its Temples, Palaces, Castles, and other Buildings;

OF

Its Metals, Minerals, Trees, Plants, Animals, Birds and Fishes;

OF

The CHRONOLOGY and SUCCESSION of the EMPERORS, Ecclesiastical and Secular;

OF

The Original Descent, Religion, Customs, and Manufactures of the Natives, and of their Trade and Commerce with the *Dutch* and *Chinese*.

Together with a Description of the Kingdom of *Siam*.

Written in High *Dutch*

By *ENGELBERTUS KÆMPFER*, M.D.

Physician to the *Dutch* Embassy to the *Emperor's* Court;

And translated from his Original Manuscript, never before printed,

By *J. G. SCHEUCHZER*, F. R. S.

And a Member of the College of Physicians, *London*.

With the LIFE of the AUTHOR and an INTRODUCTION.

To which is added,

Part of a JOURNAL of a Voyage to *JAPAN*, made by the *English* in the Year 1673.

ILLUSTRATED with many COPPER PLATES.

VOLUME I.

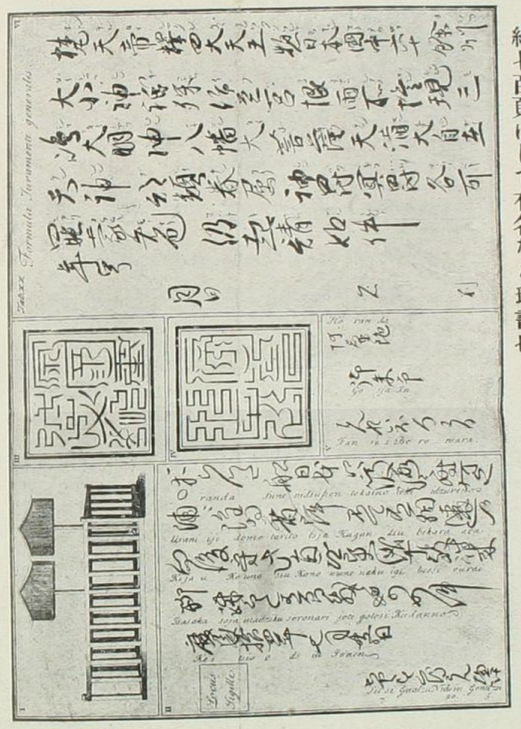
LONDON:

Printed for the PUBLISHER, and sold by THOMAS WOODWARD at the *Half-Moon* over against St. *Dunstan's* Church *Fleet-street*, and CHARLES DAVIS in *Pater-Noster* Row. MDCCXXVIII.

十二行

ケンペル著 日本史ノ插圖ノ内

本圖は插圖の一部にして風俗、器具、博物等の珍圖入約七百頁にして有名なる珍書也



古銅版畫 四拾八圖入

賣價 金貳百圓也